

71  
5931



始







はしがき

『茶話』は大正五年の春から、三四年にかけて、大阪毎日新聞紙上に掲載したもので、その後前後三巻に纏めて出版したが、いづれも今は絶版になつてゐるので、讀者から著者にあつてその重版を懇願して來るものが少くないので、その後新に起草したものの約一百篇足らずを増補して、二巻に分つてここに出版するにしました。

茶話は雨の降る静かな窓に凭れて、苦い茶を啜りながら、次から次へと頭に浮んで來るいろんな事象に對

はしがき

大正  
13. 3. 27  
内文



して、微笑した著者の境地をそのまま書いたものである。材料は書物から得たものもあり、また他から聞いたものもあるが、日日の新聞紙の讀物として起草した関係上、時日を隔てた今日になつて、それを讀み返すと、大分以前と印象が違つて來る文字も少くないやうだ。例へば政友會内閣當時原敬氏に誨へるつもりで書いたものが幾篇があるが、原氏が歿くなつた今日になつてみるに、説法の相手が居なくなつたやうで一才變な氣持がしないこともない。然し讀者の誰でもがこつそり盗み聽きして、頭を掻く分には少しも差支ないか

ら、かうしたのもそのまま收容することにした。

茶話の執筆は、前後三四年にわたつてゐるし、その間著者の内生活にも飛躍があり、動きがあつたので、材料の取扱ひ方に前と後とでは大分違つたところがあるから、上巻が後に、下巻が前に書かれたものであることだけをここに言ひ添へておく。

この書の上梓について、前の茶話出版者から快諾を得たことを厚く感謝する。

大正一三・二・二〇

著者



525-142  
71-5931

目次

燒肴は右か左か……………一  
 油蟲嫌ひの皇帝……………三  
 大食と少食……………五  
 頤の外れたのを治す法……………八  
 滑稽作家演説を盗まる……………一二  
 主人の頭を叩く女……………一五  
 一千圓の遺産處分……………一七  
 獨身主義者と結婚……………二〇  
 老畫家と音曲……………二三  
 それ猫が……………二四  
 演説家の妻……………二七

目次

洒落た料理……………二九  
 雄辯家の親孝行……………三二  
 裸體……………三四  
 ナポレオンの人差指……………三七  
 佛國小説と米國……………三九  
 貧乏畫家……………四一  
 音樂家と小説家……………四四  
 大雅と錦の袋……………四六  
 美術家と驛長……………四九  
 蓮のうてな……………五二  
 詩人を追出せ……………五四  
 芽張柳……………五六



奇 癖……………五九

文豪と旅宿の亭主……………六一

無學なお月様……………六三

詩人と百姓婆さん……………六六

蛇……………六九

毬を返せ……………七一

五千弗の提琴……………七三

王様と上布……………七六

名挨拶二つ……………七八

世界一の名醫……………八一

書肆と作家……………八二

劇作者と舞臺監督……………八四

文豪の原稿……………八六

夏 蜜 柑……………八八

御寝間の埃……………九一

器用な言葉の洒落……………九三

當世批評家氣質……………九八

大名の駄洒落……………一〇〇

時 計……………一〇四

宰相と馬鹿者……………一〇六

男と女との胸釦の相異……………一〇九

自分の葬式に自分の歌で……………一一一

滑稽作家の諧謔……………一一三

小話 數 則……………一一六

子 供……………一一八

黒い運轉手……………一二九

牧師の惡妻……………一二三

禪 僧 と 靴……………一二三

寄 附 金……………一二六

素的に短い大演說……………一二九

自動車王と子供……………一三一

獨逸帝國の豫言……………一三四

飯を安く食ふ法……………一三七

人間の大小……………一三九

婦人と多妻主義者……………一四一

下腹で猫が啼く……………一四三

珍らしい廣告……………一四六

生命の勘定……………一四八

慈善家の心得……………一五〇

大阪の道路……………一五三

落錢を拾ふ道樂……………一五五

フォッシユ將軍と葉卷……………一五七

黴菌を飲んだ化學者……………一五九

胃 の 臍……………一六二

獨帝の拳骨……………一六四

首を繋ぐ法……………一六六

天國に結婚のない理由……………一六八

名醫後藤新平男……………一七〇

タフトとお菓子……………一七三

俘虜紹介狀……………一七五

大臣の顔觸……………一七七

接吻か二十弗か……………一八〇



十六人の女房……………一八二  
俳諧師の頓智……………一八四  
結婚祝ひ……………一八六  
寄附金の請取……………一八九  
原敬氏と鯛の盆……………一九一  
骸骨の議員……………一九三  
新發明書物消毒法……………一九五  
三人牧師……………一九七  
鼻糞……………二〇〇  
敵と踊る……………二〇二  
博士と小學生徒……………二〇四  
卵を一つ……………二〇六  
顯微鏡の寄附……………二〇八

粵堂の日本料理談……………二二〇  
停車場の演説……………二二二  
花嫁を忘れる……………二二四  
子役の粗忽……………二二七  
人相見……………二二九  
桃の實……………二三二  
十二種の新聞を讀む小僧……………二三五  
仲鷹と背中合せ……………二三七  
幸運兒……………二四〇  
船酔……………二四一  
美人の木乃伊……………二四三  
氣取屋の婦人……………二四五  
老人の忠告……………二四八

煙草屋の小僧……………二四〇  
豚に脱帽す……………二四二  
女形の心得……………二四四  
賣子娘……………二四六  
悟道……………二四九  
入場料の儉約……………二五二  
座頭と花形俳優……………二五三  
詩人の健啖……………二五六  
女商人……………二五八  
女房の手紙……………二六〇  
女房の通辯……………二六三  
詩人の握手……………二六五  
百圓札……………二六七

お祖母様と黒狸々……………二六九  
婦人記者……………二七一  
知行取……………二七四  
三哩の言語……………二七六  
林檎の冤罪……………二七八  
名香大内山……………二八〇  
各國元首の收入……………二八二  
木堂と湖南……………二八四  
話題……………二八六  
五十仙の損失……………二八八  
戀病ひ……………二九〇  
苦力と料理人……………二九二  
鴈治郎のお上手……………二九四



獨帝への進物……………二九六  
 酒造禁止法案……………二九九  
 文豪の娘……………三〇一  
 婦人運轉手……………三〇四  
 歌の師匠……………三〇六  
 海洋自由問題……………三〇九  
 鏡……………三一  
 運……………三三  
 獵 自 慢……………三六  
 音樂家の大統領……………三八  
 璃 寬 襲 名……………三二〇  
 三 弗 で……………三三三  
 穿き違ひ……………三三五

國旗に接吻……………三三七  
 吸 ひ 殻……………三三九  
 馬の慈善……………三三三  
 國務卿祕藏の聖書……………三三四  
 文豪の擧つ面……………三三六  
 觀樹老の嘘……………三三八  
 英國首相の恐縮……………三四〇  
 法隆寺の覆藏……………三四二  
 蠟 マ ッ チ……………三四四  
 新近江八景……………三四六  
 捕虜を景品に……………三四八  
 偽 書……………三五〇  
 牛 の 價……………三五三

吝嗇の競争……………三五四  
 勞働者としての鼠……………三五六  
 畫の接吻……………三五七  
 靴の修繕……………三五九  
 七十二歳の下士官……………三六二  
 子供の少い村……………三六四  
 食事の流儀……………三六六  
 帽 子……………三六八  
 農夫の自慢……………三七〇  
 無題二つ……………三七二  
 菓子を舐め過ぎて……………三七四  
 武部源藏の裔……………三七五  
 花の香氣……………三七七

何故食物が高い？……………三七九  
 齒と愛國……………三八一  
 肉代五弗也……………三八四  
 愛國心と胃の腑……………三八六  
 女の顎髻……………三八八  
 名 文 句……………三九〇  
 馬は美容に害あり……………三九二  
 胃 險 小 説……………三九三  
 居士と大姉……………三九五  
 獨身主義者……………三九七  
 梅の下かけ……………三九九  
 將軍の舅……………四〇一  
 魚を食ふ人……………四〇四



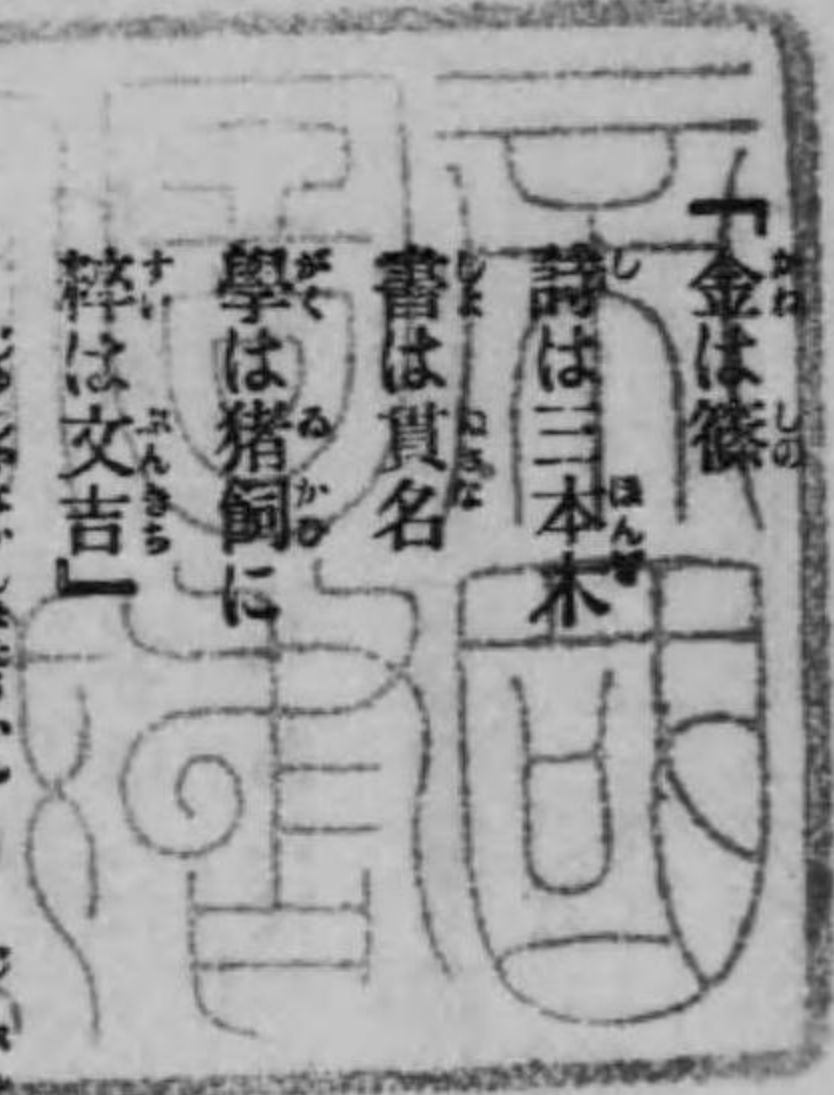
婦人の病氣……………四〇六  
 學校長……………四〇八  
 米隠し……………四一〇  
 馬を煽ぐ女……………四一三  
 鼠に噛まれた英雄の心臓……………四一五  
 温室……………四一七  
 名女優の冷笑……………四一九  
 應擧の蕎麥屋……………四二一  
 豆腐と英國人……………四二四  
 豆腐後日譚……………四二七  
 地獄の住民……………四二九  
 汗……………四三一  
 佛國領事……………四三三

客ん坊……………四三五  
 バルザック……………四三八  
 勇智仁……………四三九  
 寺か女か……………四四一  
 豆本その他……………四四三  
 狸と猿……………四四五  
 猫と四斗俵……………四四六  
 お茶盗人……………四五〇  
 貧民視察……………四五二  
 二十五仙……………四五五  
 白髮……………四五七

隨筆 茶話全集 上



燒肴は右か左か



十金は篠  
詩は三本木  
書は貫名  
學は猪飼に  
粹は文吉

こは儒者中島棕隠が、自分の友達の特長を歌つたもので、篠は篠崎小竹、三本木は頼山陽、貫名は海屋、猪飼は敬所、文吉といふのは云ふまでもなく棕隠自身の事である。

か左か右は肴焼

粹は文吉と云つただけに、棕隠はなかなかの洒落者であつた。ある時知り合ひの家へ訪ねてゆくに、ちやうど山陽もそこへ來合はせてゐて、時分ぎきだといふので、晝飯の馳走にあづからうとしてゐるところだつた。剽輕で、無遠慮で通つた棕隠は平氣で坐に上つて往つた。折角の客なので、主人は棕隠にもお膳を出した、棕隠はじろり三横目で自分の膳と山陽の



を見比べてゐたが、つい大變な事をめつけ出した。それは焼肴が山陽の方は大きくて、自分の  
は小さいといふ事である。

「いかん／＼。幾ら後客にしても魚の小さいのを見るのは、餘り氣持がいいものではないて。」  
棕隱は腹の中で慙う思ひながら、何食はぬ顔で盃を手にとつた。  
暫くすると、棕隱はいつに似ず眞面目な調子で山陽に話し出した。

「君、つかん事を訊くやうだが、姑蘇城外の蘇の字だが、あれは艸冠の下の魚と禾とは何  
方に書いた方がほんたうだつたかな。」

「蘇の字かい、あれは魚が右にあらうと、左にあらうと同じだよ。」

山陽は事によつたら魚の字なき逆ごんほになつてゐたつて構はないやうな調子で答へた。

「さうかなあ。棕隱は疊の上に指先でわざわざ字を書いて見た。魚は右にあつても、左にあ  
つても構はないんだつたかな。」

「さうさ。何だつてまたそんな事を訊くんだい。」

「實は斯うしたいからなんだ。」棕隱は著でもつて矢庭に山陽の焼肴と自分のと取りかへた。

「わ、魚は右にあつたつて、左にあつたつて一向差支ないんだらう。」

「これは失敗つた。ははは。」山陽は聲を立てて笑つた。

吾愛する頼山陽氏と世上の物語とに教へる。魚は右にあらうが、左にあらうが、早く箸を  
下した方が一番いいのである。

### 油蟲嫌ひの皇帝

油蟲といへば、蟲のなかでも一番いやな奴で、誰だつてあんな蟲を好くものはない筈だが、  
嫌ひなうちにも一番あの蟲が嫌ひだつたのは、外でもない露西亞のピイター大帝であつた。

誰にしても好き嫌ひはあるもので、ゲエテは無駄話家が嫌ひだつた。シヨペンハウエルは女  
が嫌ひだつた。スウィフトは戸を閉めない人が嫌ひだつた。さういふ變つた毛嫌ひに比べると、  
ピイター大帝が油蟲を嫌ひしたのは、別段驚く程の事ではなかつた。

だが、實をいふと、露西亞には——とりわけ露西亞の田舎には油蟲が多いので、大帝が旅行  
にもする所には、お側の衆の氣苦勞は一通りではなかつた。何故といつて、大帝は他の家へ入



る時には、室をきれいに掃除させた上で、

「御覽の通り油蟲は一匹も居りませんでございます。」

といふ、家來の保證がなかつたら、夢にも鬨をまたがうとはしなかつたから。

ある日の事、大帝は自分のお氣に入りの家來の別荘へお成りになつた。家來は大帝のお成りを喜んで、室をきれいに飾りつけた上、色々の献上物なき並べ立てて置いたが、それがひどく氣に入つて、大帝はいつにない上機嫌の體で食卓についた。

舌觸りのいい肉汁を啜りさして、大帝はひよいと顔を持ち上げた。そして側にゐた別荘の主人に呼びかけた。

「一寸訊いておきたいが、この別荘には無論油蟲など居る筈はなからうね。」

家來は油蟲と聞いたので、またいつものお株が始まつたなと思つた。

「はい、油蟲など居る筈はございません。とりわけ掃除には氣をつけて居りますので。」

「うむ。それは結構だ。」大帝はまた肉汁を啜り出さうとしたが、やつぱり氣になつてならぬと見えて、も一度駄目を押した。「ほんとうに一匹も居なからうな。」

「はい。」家來は叮嚀に頭を下けた。「よしんば居りましたところで、決してお目通りへ出て來るやうな事はございません。御覽遊ばせ、あれ、あのやうに生た奴を一匹針で壁にこめて、蟲よけの盡ひが致してございますから。」

「なに、生きた奴が針で突刺してある。」大帝は弾ちき飛ばされたやうに椅子から飛び上つた、そして主人の指さす方を見かへると、それは丁度自分の頭の上で、留針で刺された油蟲はびくびく手足を動かしてゐた。大帝の顔は菜葉のやうに青くなつた。

「この禿頭めが……」

大帝はいきなり主人の頭に拳骨を一つ喰はして、そのまま外へ飛び出した。あゝに残された主人は、壁の油蟲のやうに椅子の上で矢鱈に手足をもがいてゐた。

## 大食と少食

廣瀬淡窓は人も知つてゐる如く豊後日田の儒者であつた。ある時養子の青柳が淡窓に訊いた事があつた。



「父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」  
「禮か。」淡窓はきちんと坐つた膝がしらを養子の方へ捻ぢ向けた。「禮は無遠慮から始めるのだね。」

青邨は腹のなかで養父の語を味はつてみたが、今一つはつまりと意味が解せなかつた。で、また異つた事を訊いた。

「父上、今一つ伺ひますが、養生の極意はここにございませうでせう。」

「養生の極意か。」淡窓はすぐ返辭をした。「何よりも先づ大喰ひをするんだな。」

青邨はいくらか調弄はれたやうな氣味で下つて往つた。

その後青邨は廣瀬旭莊に出會つた。旭莊は淡窓の弟で、青邨にとつては義理のある叔父だつた、甥はまた同じ事を訊いた。

「叔父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

旭莊は直ぐ返辭をした。

「禮かい。禮なら先づ遠慮から始めるんだね。」

青邨はいつだつたかの淡窓の答へを思ひ出して、何うにも合點の往かないらしかつた。で、立續けに今一つの質問を投げ出した。

「叔父上、尋でに伺ひますが、養生の極意はここにございませうでせう。」

旭莊は譯もなく答へた。

「養生の極意は、食をひかへる事さ。」

青邨はもう我慢が出来なかつた。一方が無遠慮だと言へば、一方は遠慮だと言へるし、一方は大喰ひだと言へれば、一方は食をひかへるのだと言ふ。屹度親父と叔父貴とが馴れ合つて自分を調弄つてゐるのか、さもなければ、二人とも何にも知らない喰ひぬけの大馬鹿者に相違ないと思つた。で、幾らか冷かし氣味に理由を話して、訊いてみた。

「こんなわけでございませうが、父上と叔父上と、どちらが眞實なのでございませう。」

「どちらも眞實だ。」旭莊はきつと甥の顔を見つめて言つた。その言葉によると、兄の淡窓は身體が弱く、食が細いので、始終遠慮勝つ少食の損を知つてゐる。それとは打つて變つて、自分は健康で、いつも無遠慮と過食とから後悔する事が少くない。斯うして互に自分達の弱みを知



つてゐるから、夫を汝に繰り返させまいとするからの事だといふのだ。

道徳や人生觀は多くの場合胃に繋がつてゐるものだ。それが胃病だと、一層つよい。

### 頭の外れたのを治す法

詩人M氏のお父さんは、醫者であつた。醫者であることすら大變なのに、おまけに戴醫者であつた。戴醫者といふと、蝸牛や、螳螂と同じやうに卓ぶかい片田舎にばかり住んでゐるやうに思ふ人があるかも知れないが、實際は都にも多いやうだ。とりわけ博士なまきと肩書のついた輩に、そんなのが少くないやうだ。唯幸福なことには、肩書がつくと、病人がそれを信用してかかるから、癒らない筈の病氣までがついひよつくり快くなつたりすることがあるので、病人は勿論、お醫者自身までが、それを自分の診察がいいからなのだと思ひ違へて、本當は戴醫者であるのに氣がつかないまでのことである。だが、M氏のお父さんは博士でもなかつたら、都へも出ないでおとなしく田舎に住んでゐた。

流行らない醫者にとつては田舎も住みよきはなかつた。老人は毎日日向ぼこりをして、もつ

と病人の多い國はないものかなきと考へてゐた。さう思つて見ると、その邊の人は男も女もみんな馬のやうに達者だつた。

ある日めづらしく一人の病人がやつて來た。「來たな」とお醫者はあはてて玄關へ飛び出して見た。そこに立つてゐるのは、間のぬけた顔をした男で、涎をくりくり何か他愛もないことをいつてゐた。よく聞いてみると、頭がはづれて困つてゐるといふのだつた。何でも一人二人醫者にかかつてはみたが、さうも治りきらないらしかつた。

「おれの運が向いて來たのだ。」

と醫者は腹の中でつぶやいた。そしてこの病人を治すと、外では治らなかつただけに、自分の名醫であることが、ばつと世間に擴がつて、これからはとて受けきれないやうな大勢の病人が押し寄せて來るに相違ない。それには宅の玄關は餘り狭ますぎるから、何でも近いうちに大工を呼んで建替への見積りをとらなくちやならぬと、そんなことまでも考へた。

だが、ほんたうの事をいふと、醫者はさうして頭のはずれたのを治したものが、まるで見當がつかなかつた。で、こつそり次の室に入つて讀み古した醫術の本を大急ぎで繰つてみたが、



その本にはお産のこまばかり詳しく載つてゐて、願のとなきは唯の一行も書いてなかつた。「困つたな、何かいい分別はないものかしら。」

「困つたな、何かいい分別はないものかしら。」  
 醫者は手を挟んで考へた。アンチヘブリンを服まさうかとも思つたが、それにしても熱が少しもなかつた。下劑をかけようかとも思つたが、それにしても腹に少しの滯りもなかつた。「この病人一人でおれの運がきまらうといふのだ。」

「この病人一人でおれの運がきまらうといふのだ。」  
 醫者はまた繰り返して腹の中でかう思つた。すると、その刹那すてきない考へが雷光のやうに頭の中を走つた。

「さうだ。いい思ひ付きた。きつと治るに相違ない。いよいよおれの運が向いて来たといふものだ。」

「さうだ。いい思ひ付きた。きつと治るに相違ない。いよいよおれの運が向いて来たといふものだ。」  
 醫者は嬉しうにやにや笑つた。そして病人に手拭できつく頬冠りをさせて裏口まで連れ出した。背戸には小流が可笑しさに堪らぬやうに笑ひ聲をたてて走つてゐた。醫者は病人をその縁に立たせてかういつた。

「一息にこの溝を飛び越えなれ、するとその拍子に願が解るからな。」

病人は醫者と小流れを見くらべて變な顔をしたが、別に何ともはなかつた。そしてばつたのやうに足を揃へてひよいと一息に溝を飛んだ。

病人は醫者と小流れを見くらべて變な顔をしたが、別に何ともはなかつた。そしてばつたのやうに足を揃へてひよいと一息に溝を飛んだ。  
 醫者は急いで頬冠りをさらせてみたが病人は相變らず間の抜けた顔をして涎をくつてゐた。病人はまた頬冠りをさせられた。今度は一段と強く縛られたので、顔は小包のやうに歪んでゐた。醫者はそれを連れて裏の柿の木の下に立たせた。そして澁柿の實が貧血症のやうに青い顔をしてゐるのを見上げながらいつた。

「あすこから飛び下りるんだぞ、するとその拍子にうまく願が解るからな。」

「あすこから飛び下りるんだぞ、するとその拍子にうまく願が解るからな。」  
 病人は歪んだ顔をして悲しうに目を瞬いたが、それでもすなほに枝に手をかけて柿の木に登つて行つた。そして呻くやうな聲をしたと思ふと、もうそこから飛び下りて蛙のやうに地面に両手をついてゐた。

「あすこから飛び下りるんだぞ、するとその拍子にうまく願が解るからな。」  
 醫者は急いで頬冠りをとつて、病人の顔を覗き込んだ。

「あすこから飛び下りるんだぞ、するとその拍子にうまく願が解るからな。」  
 病人は相變らず涎をたらしてゐたが、顔を火のやうにして何か譯の分らぬを怒鳴つてゐた。それからといふもの醫者の評判は、一そう悪くなつた。氣の毒な老人はこそこそ家を疊んで



また他の村へ引越したさうだ。

### 滑稽作家演説を盗まる

マアク・トエンといへば、米國切つての滑稽作家で、この人の著作は日本では學校の教科書にも使はれて居るし、また翻譯もかなりたくさん出來てゐる。この滑稽作家がある時政治家のデビユウ氏と同じ船に乗つて英國へ渡つたことがあつた。デビユウ氏は一八六六年ごろ駐日公使として日本にも來たことのある人で、紐育埠頭の自由の像の除幕式には、わざわざ選ばれてすばらしい演説をしたこともあるし、また自分の演説集をも出版してゐるしから、お喋りの多い米國の政治家仲間でも、演説のうまいので聞けた男である。この二人の評判男が乗り合せてゐるといふことは、船出の初めからお客達の噂になつてゐたが、船が海へ乗り出して二三日すると、誰が言ひ出したものか、この二人を招んで一つお話でも承はらうぢやないかといふ相談が持ち上つた。

會はすぐに開かれた。滑稽作家と雄辯な政治家とは主賓として招かれた。主人側の肝煎り役

が言葉叮嚀に二人の卓上演説を促すと、マアク・トエンはやをら起ち上つて、持前の皮肉や諧謔やを取り交せて二十分ばかりしゃべつた。演説はすばらしい出來だつた。皆は手を拍つて笑ひ崩れた。そして口こそ出さないが、こんな感興の後では、デビユウ氏のやうな場慣れた演説家でも、さぞやりにくいに相違あるまいと思つた。デビユウ氏は起ち上つた。

「御主人役を初め淑女紳士諸君……」この名代の演説家は落着き拂つた態度で口を開いた。「今日お招きにあづかつてこの席に参りまする少し前、私とマアク・トエン君とは一つお互に演説の取り換つこをしてみようぢやないかと申し合せをいたしました。只今マアク・トエン君が申し上げましたのが、紛れもない私の演説でございますが、それに對して皆様から過分な御拍手をいただいた。私身に餘る光榮だに存じて居ります。さてこれからお聞きに達しまするのが、實は名譽ある文學者マアク・トエン君の演説なのでございます……」

かう言つて、デビユウ氏は演説の草稿を取り出さうとするらしく、ポケットへ手をやつたが、急にあはてたやうな素振を見せた。

「甚だ粗忽千萬な次第で、申し上げにくいわけでございますが、實はマアク・トエン氏からいた



だいてゐた演説の草稿をこの隠しに入れたまま、つい紛失してしまいましたので、この場合何一つ申し上げることの出来ないのは、皆さまに對して、また友人に對して甚だ申譯のないことでございます。」

かう結んで、この雄辯家は腰を下した。皆は一度にぎつと笑ひ崩れた。滑稽作家はその場の模様を見て呆氣に取られて、目をぱちくりさせてゐた。

次の日マアク・トエン氏が甲板を歩いてゐると、一人の英國人がつかつかと近寄つて來た。

その人は昨夜の席で一番大きな聲で吹き出してゐた男だつた。

「先生、昨夜はお氣の毒でしたな。」

その男はこの滑稽作家をいたはるやうに言つた。「ですが、評判と事實とは違ふもので、私はあのデビユウさんがねらい雄辯家だとはかねがね聞いてゐましたが、先生のなすつたあの人の演説を聞いてすつかり失望してしまいました。奴さん、よつほここが悪いやうですね。」かう言つて、その英國人は太い指で自分の頭を指さして見せた。それを見てマアク・トエン

は厭世家のやうに悲しげな顔をした。そしてまたしても眼ばかりぱちくりさせてゐた。

### 主人の頭を叩く女

餘程の洒落者でない限り、髻を剃つたり、頭を刈つたりすることはかなり氣分の軽い時でなくては、誰にとつても億劫なものだ。徳富蘆花氏などは、隠者のやうな生活をしてゐるだけに滅多に髪も刈らず、髻も剃らないと見えて、髪の毛の蓬々とした様をよく見受ける事がある。

むかしは男は月代といふものを剃つたものだが、それは髻を剃る以上に面倒くさいものであつた。伊勢の桑名に松平定綱といふ殿様があつた。氣難かしやで、思ふ存分我儘を振舞つたものだが、とりわけ月代を剃るのが嫌ひであつた。

「我君、だいぶお頭が伸びましたやうで御座いますが……」

家來がかう言つてそれとなく催促しても、殿様は餘程氣輕な時でないに、滅多に月代を剃らうとは言ひ出さなかつた。やつと口説き落して、家來が剃刀を持つて後に立つと、氣難かしやの殿様は、螻蛄のやうに頭を振つて、どうしても剃らさうとしなかつた。



「我君、お危う御座います。」と剃刀を持ったまま泣き出しさうに家來が言ふと、殿様は尙調子に乗つて頭を振立てた。

「俺の頭はこんなにくらぐらするのが癖だからの。」

と終ひには、家來が粗忽をして、家來にこつて餘り大事でない殿様の頭によく傷をつけたものだ。すると、氣儘な殿様は、主人の頭に傷をつけた不届者だといつて、すぐに立ち上りさま手打ちにしたものだ。

慚うした理由で、家來の幾人かは手打ちにされたので、終ひには誰一人月代を剃らうといひ出す家來はなくなつた。で、殿様の頭は荒野のやうに髪が伸び放題に伸びた。

殿様の頭が、だんだんむさくろしくなるのを見た奥方は、譯を聞いて初めて驚いた。そして其の次ぎの日には、奥方自身殿様の月代を剃らうと言ひ出した。殿様はその日も蝶帖のやうに頭を振つた。まさか剃刀傷をつけたからと言つて、奥方を手打ちにする氣はなかつたらうが、この頭は剃刀の前には、ぐらぐらしないでは居られなかつたのだ。

奥方はそれを見るに、矢庭に拳をふり上げて、二つ三つ殿様の頭を叩きつけた。まるで締め

の緩むだ古釘を打ち直しでもするやうに。殿様はびつくりした。

「何を。」

「何も致しません、あなたの悪いお癖を直したいばかりでございます。」

奥方はそれを機に、殿様をたしなめた。殿は黙つて言ふなりになつた。

女にも色々ある。貧乏人の女房になるものは、頭を叩きつけられる辛抱さが必要だが、富豪や大名の奥方になるものは、時々相手の頭を叩きつける程の氣力が無くて叶はぬ。

### 一千圓の遺産處分

土耳其であつた話である。あすこの或る信心深い富豪が大病にかかつて死にかけたので、一人息子を枕もこに呼んで、遺産の始末を細々と話した。

「で、お前に残してやるものは、それで判つたらうが、ここにまだざつと千圓ばかり残つてる金がある。」

病人は苦しうな息使ひをしながら言つた。



「はい、ございます。いかが始末したものでございませうな。この金は。」孝行者の息子は、いつその事この千圓は親父が墓場へ持つて行つてはどんなものかといひたいやうな考へを持つてゐた。

「それについてお前に頼みがあるのだが——」病人は破けた風琴のやうに悲しさうにまた喘き入つた。「その千圓は世界中でお前が一番賤しいと思ふ人間に呉れてやつて欲しいのだ。」

「承知致しました、きつとさやう取計らひます。」孝行息子は今更のやうに親父の慈悲ぶかひのに感心して、鼻をつまらせながら返事した。

病人が亡くなつて後、息子は裁判所へ往つて遺産相続をしたが、その折自分のために色々面倒な手續をしてくれた裁判官の顔を見るに、急に例の千圓の事を思ひ出した。

「さうだ、あの千圓をこの男に呉れてやらう、相手は裁判官だ、また後々の都合がある事だから。」孝行息子は親爺の遺言によつて、遺産のうち千圓を裁判官に進呈したいと言ひ出した。

「なに、千圓をくれる。そんな物は貰ふわけに往かない。裁判官はわざわざ取つておきの嚴つべらしい顔をして言つた。」俺はお前の親爺と近づきでは無かつたぢやないか。見ず知らずの他

人から遺産を貰ふといふ法はない。」

「いわ、貴方のものです。是非貴方にさし上げてくれと親爺がくれぐれも申しおいた事なんですから。」

孝行息子は何でもかでも千圓を押し付けようとした。

「困つたな。遺言といふのであつてみれば。裁判官は眞實困つたやうに顔を手でおさへた。」ちや、空取引をしよう。幸ひ裁判所の庭に雪がきつさり積もつてゐるから、この雪を千圓でお前に賣るとしよう。ね、さうすればいいだらう、雙方の言ひ分が立つて。」

孝行息子はそれに同意して、千圓を渡して歸つた。すると、その明る朝また裁判所へ喚び出された。

「お前は昨日この構内の雪を買つたね。あんな物をいつまで置かれても迷惑だから、直ぐ引取つて貰ひたい。」

裁判官は物尺のやうな嚴正な顔をして言つた。孝行息子は呆氣にとられたが、さてどうする事も出来なかつた。



「雪を引取る事は出来ないといふか。」裁判官は言った。  
 「それぢや契約違反の賠償として二百圓の料金を命ずる。」  
 孝行息子はべそをかきさうな口もとをしたが、それでも黙つて二百圓を拂つて外へ出た。そしてふと親爺の遺言を思ひ出した。  
 「さうだ、親爺さんは世界中の一番賤しい男に連れてやれと言つたつが、まあ、よかつた、これで遺言通りにしたといふもんだ。」

獨身主義者と結婚

今度の歐洲戦争で哀れな犠牲者となつた英國のキツチナア元帥が、名高い獨身主義者だつたのは誰もが知つてゐる通りだ。女嫌ひな獨身主義者にとつて、キツチナアを亡くしたのは、世界を半分失くしたのと同じ程の損失だつたに相違ない。  
 キツチナアがまだ印度に居た頃、その下で副官を勤めてゐた或る若い將校が、今度結婚したから、暫くの間休暇を貰つて、本國英吉利に還へらせて貰ひたいと言ひ出した。女嫌ひな元

帥は、結婚だと聞くと、額にさつと皺を寄せたが、それでも談話のすむまではじつと辛抱してゐた。

「結婚するつて。でも、お前はまだ二十五にもならんぢやないか。一年待ちなさい。そして其の上でまだ結婚したかつたら休暇を與へる事にしようから。」

元帥は恚う言つて、若い將校の玉葱のやうな青白い顔を見た。將校はふくれつ面をしたが、それでも言葉はかへさなかつた。

一年は過ぎた。若い將校は、キツチナアが上機嫌な折を見計つて、また以前の賜暇問題を持ち出した。

すると、キツチナアの石のやうな四角い、そしてまた石のやうな嚴肅な顔に、急に石のやうな冷たさが現れて來た。

「十二箇月考へぬいても、お前はまだ結婚したいつて言ふんだね。」  
 「はい、早く身を固めた方がいいかと思ひまして。」

若い將校は、腹の減つた狗が主人の顔を見る所のやうな泣さうな眼つきをした。



「それぢや仕方がない。休暇を取るのもよからう。」この名高い獨身主義者は思々しきうに白い歯を見せながら言つた。「相手は女ぢやないか、それに一年も續いて愛情をもつてゐるなんて、俺はそんな男がこの世に有らうとは思はなかつたよ。」

若い將校は希望通りに休暇を貰つたらしいので、加之に好きな娘と結婚する事さへ出来たらいいので、別に氣むつかしやの元帥と議論する必要もなかつたのだ。で、お辭儀をして、室から外に出ようとしたが、それだけでは、何だか物足りないやうに思つたので、つかつかと後がへりをした。

「申し添へておきますが、私が結婚しますのは、去年のと同じ女ではございませぬから。」

キツチナアはだしぬけに耳朶を引張られたやうな顔をした。——若い將校め、何といふ作法な事を言つたものか。こんなのに限つて、一度は女の前で、いほがへりをする奴さ。

### 老書家と音曲

洋書家淺井忠氏の追善が一歳東京の根岸で開かれたとがあつた。その折鈴木鼓村氏が箏を弾

いた。鼓村氏が箏を持出してそろそろ爪調べにかかる、そこに居合せた多くの人達の中から、誰だかだしぬけに手を叩いたものがあつた。皆はその方を振り向いた。そこにはNといふ老つた洋書家が六朝の文字のやうに鱗子張つて控へて居た。N氏は皆の眼が一度に自分の方に注がれる、幾らか氣味が悪かつたかして、傍に居る老年の洋書家小山正太郎氏の方へ顔を捻向けて言つた。

「小山さん、鈴木君の箏は豫て噂に聞いて居ましたが、實際旨いものですね。」

小山氏も餘り音曲の方は確でなかつたらしく、あやふやに頭を動かして何とも答へなかつた。すると、其の直ぐ後にIといふお伽話の作家が罪のない顔をして控へて居たが、二人の話を聞くにすぐすくすく笑ひ出した。そして後からN氏の肩を叩いた。N氏は大朝文字のやうな四角い顔を後へふり向けた。

「どうしたんだい。」

「どうもしやしないが、君が餘り面白い事を言ふからさ。」N氏が富岡鐵齋、岡田三郎助氏などと一緒に、畫壇の三疊だといふとを知つて居るI氏は、態々自分の口を相手の耳に押付けて、



大きな聲で喚いた。「鈴木君は未だ箏を弾きやしないよ。あれは唯の爪調べぢやないか。」  
 「さうか。爪調べか。」N氏は何か固いものを一飲みにくつと飲み込んだやうな顔をした。「それにしても爪調べが素敵だね。」

何時だつたか、清朝の光緒皇帝が未だ達者で居た頃、波蘭のあるヴァイオリン弾きが聘ばれて御前演奏をやつたことがあつた。音楽家は幾つか名高い小曲を弾いた。するに皇帝はそのたんに感心したやうに上品な顔を動かしたものだ。曲が終ると、音楽家は皇帝に向つて訊いた。

「陛下、あなたはどの曲がお氣に召しましたか。」

「皇帝は即座に答へられた。」

「お前が最初に弾いた曲こそ、世界一の名曲だと思ふ。」

音楽家が最初に弾いたといふのは、それはただの調律で、何の樂曲でもなかつたのである。めでたしめでたし。

### それ猫が

眞言宗御室派では、管長の後任選挙について、高野山の法性有鑿師と浦上隆應師との間に、かなり激しい對抗運動が持上つて居るらしい。

世の中を超脱した僧侶にしてもやはり小さい庵よりは大きい寺の方が住み心地はいいものに見える。

さういふなかに、往時曹洞に風外といふ禪坊主がゐた。きうしたもののか、大寺が嫌ひで、老つてからは大阪の烏鵲樓に引込んで、暢氣に膝小僧を抱いてくらしてゐた。

そこへ、ある時讃岐の高松藩から使者がやつて來た事があつた。高松の殿様は、自分の領地が猫の額ほゞしかないので、誰かいい坊さんに會つて、もつと廣い心の世界の話も聴きたく、おまけに出来る事なら、その坊さんの傳手で、後の世にはもつと祿高の多い土地を配がつて貰ひたく思つてゐたので、恚うしてわざわざ使者を立てて、風外を高松に迎へようとしたのだ。だが、風外はさうしても肯かなかつた。

使者は谷本博士と同じやうに讃岐訛りを出して口説きにかかつた。殿様の云ひつけを承はつて來たからには、是が非でも風外を連れて歸りたかつた。風外は泣き出しさうな使者の顔を



面白さうにじつと見入つてゐたが、相手の言葉が一寸途切れると、いきなり下臉を押へてあか  
んべいをしてみせた。

使者は呆つ氣に取られて歸つて往つた。だが、殿様の前ではまさかにあかんべいの眞似も出  
來なかつた。

風外が三河の香積寺に居た頃、ひと夏本山から寺へ使僧が立つた事があつた。その日は蒸暑  
かつた。夕方になつて風外は風を納れようと思つて、團扇を片手に木履を穿いて使僧の休むで  
ゐる室の前をぶらぶらしてゐた。

使僧はしたたか者だつた。簾越しに風外の浴衣がけの姿を見ると、黙つては居られなかつた。  
「猫ぢや、猫ぢやとおつしやいますが、猫が下駄はいて來るものか。」

使僧はそれとなく風外にちよつかいのかつて見た。風外は猫のやうなおとなし顔立で聞  
た男だつた。猫は黙つて下駄をひきすりながら影を隠した。

その翌る日、使僧が寺を發たうとすると、風外は多くの弟子達を山門の兩側に並べて、自分  
は使僧の後から見送りに出て來た。そして使僧が山門の闕を跨がうとすると、だしぬけに後か

ら大きな聲で、

「それ猫が……」

と怒鳴つた。使僧はびつくりして後をふり向いた。そこには猫は居なかつたが、猫によく肖  
た禪坊主がからからと笑つてゐた。使僧は鼠のやうに小さくなつて逃げた。

### 演説家の妻

佛蘭西自然派の文豪フロウベエルは、自分の作物が出來上ると、きつと宅の婆やに讀んで聞か  
せたものだ。そして婆やが了解めないやうな所があると、すぐそれをもつと解りやすい文句に  
書き直したものださうだ。

伶俐な婆やが宅に居ないものは、據なく女房にでも讀んで聞かせなければなるまいが、多  
くの場合文學者の女房は、言ひ合せたやうに、自分の良人の書いたものに餘り價値を置いてゐ  
ない。甚いものになると、自分の良人の書いた作物の名前すら知らないものがある。もしか小説  
家の中で、自分の女房を愛讀者の中に數へる事が出來る人があつたなら、氣の毒な事には、そ



の人は極めて下手な作家と言はなければならぬ。

演説家の女房の中には、わざわざ演説會場まで出掛けて行って、自分の良人が蟹のやうに手をふりあげて大聲に喚き散らしてゐるのに聞き惚れてゐる者がある。演説といふものは、餘り賢い人のするものでないし、餘り賢い人の聴くものでもないしするから、女房が聴いたつて、猫が聴いたつて、少しの差支もないかも知れない。

英吉利のヂスレエリイは、聞けた演説家だったが、議會で大演説でもしようといふ日には、きつて夫人を傍聴席に送り込んだものだ、ある時議會で何かの演説をするといふので、いつものやうに夫人と一緒に馬車に乗込んだ事があつた。

いいお天氣の日で、乾いた路を馬は元氣よく走つた。夫人は外の空氣に觸れようと思つて、窓硝子に手をかけたが、さうした機みか、間違つて窓枠に指先を挟まれてしまつた。

夫人は痛くて堪らなかつたので涙ぐんだ眼で良人の方を振りかへつた。ヂスレエリイは傍に女房のゐる事すら忘れたもののやうに、黙つて何か考へ込んでゐた。

「あ、いけないいけない。演説の仕組を考へてゐらしやるんだわ」夫人は腹の中で考へた。「折

角の演説なんだわ、邪魔立して出来を損じたりしては大變だわ。」

夫人は良人の氣を紛れさすまいとして、拗れるほど痛い指先をもじつと辛抱してゐた。もしか指先の代りに首根つこを押へつけられてゐても、夫人は屹度辛抱してゐるに相違なかつた。

馬車は議會の玄關に着いた。自分の女房の指先が、窓枠に噛れてゐると氣附いた英吉利の大政治家は、キャベツのやうに青白くなつた。やつと引き出された夫人の指は、紫ばんでひしやけてゐた。大政治家は英吉利帝國が捻麩麩のやうになつたと思つた。

### 洒落た料理

料理ほど大切なものはない。オスカア・ワイルドだつたか、「朝飯を旨くさへ食はして呉れたら、まあ大抵の事は辛抱しておくさ」と言つたが、實際食事を旨く食はして呉れたら、その他の事は知らぬ顔をして見過してもいい。

京都の八新が料理で名高かつた頃、(惜しい事には今はそれ程ではない) 或る夏の事、主人が夜のしらじら明けに表戸を開けにかかると、その折丁度表通りを通りかかつてゐるに、



ひよつくり小鳥のやうに中へ飛び込んで来た。主人は驚いて理由を訊いた。

「私は京見物に参つた丹波の者で御座いますが……」

お爺さんは叮嚀な口上で挨拶した。その言ふ事を聞くに、お爺さんは田舎に居る時から、この店の板前の評判を聞いてゐたので、京見物に来たのを仕合せに何かな二品三品見つけられたもので食べさせて貰ひたいと言ふのだつた。

「これはほんの僅ですが……」と言つてお爺さんは財布から十圓紙幣を一枚取り出して主人の掌面においた。

「胡散臭い爺やな。」と八新の主人は睨んだ。よく見ると、爺さんにはどこに一つ丹波の猿吉らしい所がなかつた。衣服の着こなしといひ、態度といひ、氣が利いてゐて、誰が見ても中京邊の物持の御隠居の洒落者に相違なかつた。

「てつきり悪戯しに来よつたのやな。」と主人はすぐに相手を見ぬいた。さういふ事なら此方にも考へがないでもなかつた。主人は相手を言ふがままに丹波の田舎者としてもてなした。そして朝飯の出来る間、暫らく休んでゐて欲しいと、お爺さんを小間に通して待たせておいた。

主人はすぐに得意先の大阪の漬物問屋に電話をかけた。そして西瓜の奈良漬の飛切りなのを大急ぎに熊手で京都の店まで届けて貰ふように頼んだ。店の若い者の一人は自轉車で宇治橋まで走らされた。名高い三の間の水を汲んで来させようといふのだ。

三の間の水といふのは、竹生島の辨財天の社壇の下から流れ出ると言ひ傳へられた美しい水で、往時秀吉が伏見に居た頃には、茶を立てるといつては、いつもこの水を汲ましたものだつた。

水の味といつては、また格別のもので、京都には茶人が多かつた故で、水自慢の古い井戸が水たに方々に残つてゐる。京役者の随一人阪田藤十郎は、江戸興行に行く時、江戸の水は不味くて、とても咽喉を越さないからと言つて、わざわざ京の水を樽詰にしたのを、幾つか荷駄馬に乗せて海道筋を下つて行つたといふ事だ。

暫らくすると、三の間の水もついた。大阪の漬物も着いた。八新の主人は三の間の水で茶を煎じて、漬物を菜に茶漬を出した。

「ほんの有合せものでお口に召すかどうか知りませんが……」お爺さんは一口一口噛みしめる



やうにして茶漬を食べた。そして三杯目の茶碗を惜さうに膳の上におくも、感心したやうに首を捻った。

「いやすつかり噂通りで、まったく恐れ入りました。」

爺さんは叮嚀にお辭儀をして玄關を出た。その後姿が見えなくなると、主人は片手をぐつと握りしめて、今のお客を突き飛ばしでもするやうに前へ出した。

「へッ、みんなもんやい。態あ見やがれ。」

### 雄辯家の親孝行

親孝行にも色々ある。支那の實行家（親孝行にも理論家と實際家と二通りの人間がある。）の爲て来た行跡を見ても、寒中に笥を掘つたり、裸で張りつめた氷の上に寝たり、いろいろ變つた型がある。

米國民主黨の領袖ブライアン氏が、いつだつたか、自分のする演説會場へ、たつた一人しかない大切な母親を引張つて往つた事があつた。この名高い演説家の考へでは、廣い會場で、大

勢の聴衆の前で、自分の息子が瀧のやうな雄辯を揮つてゐるのを見るのは、老年の母に三つてどんなにか嬉しからう。憊うして自分は聴衆を教育する上に、母親をも慰める事が出来る。こんな結構な方法が外にあるものではないと、ブライアン氏はしみじみ自分の口達者なのを破しく思つた。

ブライアン氏は演壇に立つた。そして雷のやうな聴衆の喝采を浴びながら、得意のお喋舌をし續けた。演説はいつものよりもすつと長かつた。たつた一人の母親が聴いてみると思へば、演説もしい加減の事は云へなかつた。で、少しは母親の好きな砂糖や嘘やを混せて、顔中を紅にして喚き散らした。

演説がやつと濟むと、ブライアン氏は額の汗を拭き拭き、母親の傍へやつて来た。

「阿母さん。さうでした。巧かつたでせう。」

「さうですね。かなりよく出来たやうだつたよ。」母親は睡むさうな眼をくしやくしやさせながら言つた。

「あなたのお氣に召すやうに今日は特別に長くやつたのですよ。」ブライアン氏は鼻先の汗を式



き忘れて言った。

「さうかい。それであなたに長かつたのかい。」母親は悲しそうに言った。「それちや三分の一位に切りつめてお呉れだつたら、もつと阿母さんは喜んだらうよ。」

裸

體

むかし江戸に龜田鵬齋といふ學者が居た。貧しい學者にしても夏はやはり金持同様に暑かつたから、鵬齋はいつも六月になると、すつと眞つ裸體で暮してゐた。その鵬齋に何とかいふ小娘があつたが、その小娘もたつた一枚きりの單物を汚して、母親に洗濯して貰ふ間は、いつも裸體で待つてゐたといふ事だ。

ある時、鵬齋は知合の饗應に招かれて行つた事があつた。丁度夏初めで、鵬齋は別に着代を持つてゐなかつたから、着古しの單物のまんま出掛けて行つた。

むかし頼春水は、貧乏な所から、羽織といつては、いつも白木綿を裁つて着てゐた。ある時仲よしの管茶山がそれを見て、随分古い羽織だといつて、

いつ見ても變らぬ色の羽織哉

と言つて、一句詠んで冷かした事があつた。すると、負ぬ氣の春水は、すぐ篋刀返しに

お前の袴いく代經ぬらん

と後の句を繼いだ。茶山は驚いて今更のやうに自分の袴を見た。袴は十年來着古した古い物だつた。鵬齋の着物がこんなに古かつたかきうかは知らないが、あまり負けは取らなかつたに相違なかつた。

夜が更けて、鵬齋はのつそりと歸つて來た。女房が玄關まで出迎へて見ると、この學者は眞つ裸體のまま黙つてそこに衝つ立つてゐた。

「まあ、あなた、さうなすつたの。」女房は驚いて口を開いた。

「すつ裸體ぢやありませんか。」

「うむ、御覽の通りすつ裸體だ。」鵬齋は熟柿臭い息をついた。

「そんな姿をして、人通りのなかをお歸りになりましたの。」

「うむ、歸つて來たよ。」



學者の女房は、誰でもが平素から辛抱強くしつけられてゐるものだが、それでもどうかすると、蟻螂のやうに痲癩を起し兼ねないものだ。鴎齋の女房さんは屹となつた。

「歸つて来たよもないもんですよ。一體着物はどうなすつたの。」

「道へ捨てて来たよ。鴎齋は鬚の伸びた願を、あんぐりあけて大きな欠伸をした。」「酔つ拂つて溝へ陥つたもんだでの。」

「溝へおつこつたつて、着物まで捨てなくつてもよさうなもんぢやありませんか。」

女房は鴎齋の單物と一緒にくたに、自分の櫛も、笄も、貞操も投げ捨てられたやうに脆つてなつて口を尖らした。

「だがの……」鴎齋は素直に言譯をするらしく言つた。「着物がべとべとに汚れて、臭くつて仕様がなないもんだでの。」

「臭くたつて……」女房はぎんな臭いものでも、まだ貧乏よりはましだといふ事をよく知つてゐた。「明日からは、もうお召になるものがないぢやありませんか。」

「着る物がなかつたら裸體であるさ。」

鴎齋は片手を伸して、脊骨の邊りをほりほり掻きながら言つた。身體中にささくささく臭い匂ひがした。「乃公だつて裸體で生れて来た人間なんだからな。」

「それもよござんせう。」女房はぶりぶりしながら言つた。鴎齋がそれから幾日間裸體で通したかは私も知らない。

### ナポレオンの人差指

大和薬師寺の境内から発見されて、國寶の一つとなつてゐる吉祥天女の繪像は、今では日本の美術史の上で、なくてはならない代表作となつてゐるが、あの天女の指は、不思議なことに右左とも六本つつある。ある人は、あの繪について、あれは當時に名前の高かつた高貴の人をモデルにせり、その人が指が六本あつた所から、あの天女も六本指に描かれたといふやうなことではなからうかといつてゐるが、どうかするとそんな理由から指が一本つつ多くなつてゐるのかも知れない。

指といへばトルストイの書いた「戦争と平和」によると、大ナポレオンの手は皮膚が柔らかか



で、色白で、いつも天瓜粉の匂ひがぶん／＼してゐたさうだ。そして指の節々が女のそれのやうにふつくりして括りがはいつてゐたさうだ。あのすばらしい英雄が、かうした娘つ子のやうな指を持つてゐたかと思ふと、一寸をかしくなるが、それよりも不思議なのは、あの人の人さし指は中指よりもいくらか長かつたといふことである。人さし指が中指より長い人は稀にあるが、その中で萬人にすぐれた男は、ナポレオンの外には先づないといつていい。

今一つ指をいへば、徳川時代の名高い國學者上田秋成は子供の時疔瘡を患つたさうで、右手の中指が小指よりも短く、また左手の人さし指も丁度同じ位の長さで、とても指の働きはしなかつたといふことだ。

こんなわけで小さい時から不具者扱ひにせられて、書なきあまり習はなかつたものさうだが、それでも晩年になると、心まかせに書いたのが面白いといつて、好き者の間にならぬもて囃されたものだ。すると自分でもついその氣になつて、いつばしの書家氣取りに、随分揮毫をもすれば、また人の頼みに應じて、自分の著作の中で刊行にならない書物を筆寫して、そのお禮で生計の途を立てたこともあるといふことだ。

### 佛國小説と米國

佛蘭西のアルフォンス・ドオデエがその傑作「サッフオ」で文壇に乗り出して、一足飛びに大家になつた時のことである。紐育の書屋でふだん宗教物ばかり出版してゐる店が、歐羅巴のいろんな國から、その代表的作家の代表的著作を選んで何々叢書といつたやうな小説集を出版しようともくろんだものだ。そして佛蘭西からはその代表作家としてドオデエが選ばれた。

ドオデエから送つてよこしたのは、丁度そのころ出版したばかりの「サッフオ」であつた。本屋はその翻譯をかねて昵懇のある物堅い牧師さんに頼んだ。牧師さんはそんな風な書物を讀むのは多分初めてであるらしかつた。讀んでみるに、男と女のみだらなことがちよいちよい書いてあつたのでびつくりした。で、早速本屋に駈けつけて来て、こんな書物を翻譯したら、アメリカ中は今に果物のやうに腐敗してしまふと、顔色をちがへて意見立てをしたものだ。本屋はすぐに原作者宛てに電報を打つことにした。

電報が巴里に着いた時には、ドオデエは先輩や友達と一しよにある料理屋で御馳走を食べて



ゐた。一座の顔觸れは、ヴィクトル・ユウゴウ、そのお弟子で始終赤いシャツを着て、佛蘭西のロマンチストは自分で御座ると言つた風に、胸をそらして巴里の町を闊歩してゐたテオフィユ・ゴオテエ、それからそのころずつと巴里に滞在してゐた露西亞のツルゲネエフといつたやうな人達だつた。その人達は、その日もドオデエの新作を褒めそやしてばかりゐた。そこへ使が持つて來たのが、紐育の本屋からの電報だつた。「サツフォ」の作者は胸を躍らしながら封を切つた。なかには

“Sapho Objectionable”

といふ言葉があつた。思ひ上つてゐたドオデエには第二の言葉の意味がさうしても解らなかつたので、變な顔をして電報をそのまま卓子の上に放り出した。皆はぎれぎれと覗きこむやうにして電報の文字を拾つた。アメリカの小うるさい道德的標準など、少しも氣にかけてゐない歐羅巴の小説家には、何のこともやら皆目解らなかつた。飲みさしの葡萄酒のコップを手に持つたまま仔細らしい顔をして、ぢつと考へこんでゐたツルゲネエフは、暫らくすると

「ああ、やつと解つたよ。」

といつて、ドオデエの顔を見た。その説明によると、これは多分發信人が佛蘭西語と英語とをこつちやに使つたからだといふのだ。なるほごさう聞けばそんなやうな氣もした。で、早速紐育の本屋宛に電報を打つことに決めた。電報の文字は

「モットワカリヤスクツツレ」

といふのだ。電報を出してしまふと、

「さうもアメリカの田舎つべねには困つちまふ。」

といひひひ、みなは旨さうに葱のほひのするスープをちゆうちゆう吸ひ出した。

### 貧乏畫家

むかし渡邊華山の弟子に、櫻間青崖といふ畫家が居た。貧乏人の多いむかしの畫家の中でも、これはまたずば抜けた貧乏人で、住居といつては、僅に胡坐が組まれる程の小さな家で、雨が降る日にはいつも雨漏りがして仕方がなかつた。そんな折には、青崖はいつも左の手で雨傘をさしながら、右の手ではせつせと繪を描いてゐた。そんな雨漏りする疊の上で、何も繪など描か



なくともよきさうなものだ、ちつと腕を拱んで、考へ事でもしてゐたらよかりさうなものだが、貧乏な畫家には考へ物なきは禁物であつたので、青屋は雨傘をさしながら、せつせと繪を描いた。

或る夏の日の事であつた。同じ華山の弟子の一人、椿山といふ男が青屋を訪ねて来た、するど表の戸がびたりと閉つて居るので、椿山は外から大きな聲で喚めいた。

「櫻間先生、先生はおいででは御座いませんか。」

暫くする中から掠めたやうな男聲で、

「先生は今日はお留守ですよ。」

と言ふものがあつた。椿山は平素から青屋の宅には主人の他、猫の子一匹居ないのを知つて居るので、主人の留守に、誰か應答するものがあるのを不思議に思つたが、さう思へば今の聲がさうやら、青屋自身の聲柄に似て居るやうに思はれてならなかつた。

椿山は又聲をかけた。

「先生は何方にいらつしやいました。」

「何方へ行つたか、そんな事が判つてたまるものか。」

家の中からは、大きな聲で叱りつけるやうに怒鳴つた。其の聲こそ擬ふ方のない青屋の聲であつた。

「さう仰有るのは先生御自身ぢや御座いませんか。」

椿山はさう言ひながら破けた障子の隙間から内部を覗いて見た。内部には青屋が素裸の儘胡坐をかいて居たが、名前を呼びかけられたので、ついそのそそ起ち上つて来た。

「俺さ、俺には違ひないが今一寸他人に入られては困るんでね。青屋はかう言ひながら、障子の側まで歩いて来た。表に洗濯物の單衣が干してあるんだが、もう乾いたかしら……氣の毒だが一寸觸つて見てくれないか。」

椿山は表の井戸端を見た。成程其處には洗濯物が一枚、物干竿に引かかつて居たが、さんとお心の潤いおてんご様でも、つい顔を顰めないでは見て居られないやうな單衣物であつた。椿山は一寸手に觸つて見た、單衣物はさうにか乾いて居た。

「先生、乾いて居ますよ、洗濯物は。」



「乾いて居るか、それはいい、そんなら俺も留守ぢやない。」青屋はかういひながら、戸を心持開けて、中から顔を出した。「氣の毒だが、序に一寸其の洗濯物をとつてくれないか。」椿山は言はれる儘に洗濯物をとつた。青屋は安心したやうに戸を押し開けて外へ出た。見るに肌には何も着けて居なかつた。椿山は自分の方が顔が赤くなるやうな氣持で、背後からすり洗濯物を着せかけた。青屋は安心したやうに聲を揚げて笑つた。

### 音楽家と小説家

波蘭共和國の今の大統領パデレウスキ氏が秀れた洋琴家である事は知らぬ人もあるまい。大統領にならぬ前、氏はよく米國へ渡つて演奏會を開いたものだが、ある時何かの會合で、文豪ジャック・ロンドンに會つた。

ジャック・ロンドンといへば、名高い「野性の聲」で狗や狼の生活をかいた作家で、原始的生活が好きで餘りから、自分でも焼肉の代りに、血だらけな生の肉を嚙つたり、取り立ての蝸牛をその儘鵜呑みにしたりした男だ。

小説家は髪の毛の長いこの音楽家を見るに口をきつた。

「パデレウスキさん、洋琴つてなかなか好いものですね。私も大好きです。」

「ほほう、結構ですね。」

パデレウスキ氏は外に掛け替へのない大事な指を膝の上で組み合わせながら言つた。「貴君は文化的な生活はお嫌ひのやうに承はつてみましたから、實は洋琴の方も餘りお好きではなにかしらと思つてみましたので……」

「いや、さうしてさうして、洋琴は大好きです。」小説家はこれまでいろんな荒仕事をして來たらしい、巖丈な兩肩を揺ぶりながら笑つた。「恚う見ても、私は洋琴のお蔭で露命を繋いだんですからね。」

「洋琴で？ してみるに、貴方もお弾きになるんですね。」

パデレウスキ氏は洋琴を弾く狼にでも出會つたやうに、眼を大きく睜つて相手の顔を見た。

「いや、弾きません。だが、眞實の事をいふと恚うなんです。」小説家は血だらけな牛の肉を嚙



み馴れた口も子を子供のやうに養めながら言つた。「私の父はミスシツピイで農園をやつてゐましたが、ある時洪水で農園はすっかり臺なしにされてしまひ、加之に私達の住家も根こそぎ持つて往かれました。」

「ほほう、夫はお氣の毒でしたね。」バドレウスキイ氏は心から氣の毒さうに言つた。そして小説家も音楽家も同じやうに、餘りいい月日の下には生れ合はさなかつたものだなといつたやうな表情をした。

小説家は言葉を次いだ。「その折親父は卓子の上に乗つて逃げましたが、私は洋琴につかまつて、漸と生命拾ひをしたやうな始末なんです。」

### 大雅と錦の袋

近頃考古學の知識が一般に引まるにつけて、古い民族の遺蹟だと言ひ傳へられた地方へ往くと、物ずきな蒐集家が鶴の目鷹の目で、石器の破片か何かを嗅ぎまはつてゐるのをよく見かける。

池大雅は風景畫家だけに、よく方々を旅行しまはつたものだが、到るころで珍しい瓦だとか、石だとか拾つて歸るのを忘れなかつた。ある時奥州へ往つて、勿來の關址を訪ねた事があつた。その折も大雅は京に残しておいた女房の事などは、すっかり忘れてしまつて、珍しい瓦を捜さうとして雑草の生へ繁つたなかを這ひまはつてゐた。

大雅は學者や藝術家によくある「恍惚」の境地にすぐ入れる畫家で、面白い話をするか、いい景色を見るかすれば、その瞬間は借金や女房やのある事も、すっかり忘れる事の出来る程重寶な心をもつてゐた。ある時遠國に旅立ちをしようとして家を出た事があつた。そのあとで妻の玉瀾は、大雅が生命より大事な筆を忘れてゐるのに氣がついたので、それを持つてすぐにあとを追ひかけた。そして忘れ物だと言つて筆を手渡しすると、大雅は鄭重に程頭を下けた。「ごなたかは存じませんが、御親切に有りがたう存じます。」

家を出て、道の五六町も來ぬうちに、この不思議な畫家は、もう女房の事をも忘れてゐたのだ。大雅は草のなかの窪地で、やつと古瓦を見つける事が出来た。で、叮嚀に土を拂ひ落して、持つて來た錦の袋にそれを納めて首にかけた。



そほろな、旅籠のした姿をした旅人が、美しい錦の袋を大事さうに胸に下けてゐるので、胡麻の蠅はすぐ附いた。三日といふもの、二人の胡麻の蠅は大雅の後をつけて宿に泊つたり、宿を發つたりした。

四日目の正午すぎ、大雅がある茶店の店さきに憩うと、胡麻の蠅二人も同じやうにそこへ来て腰をおろした。そしてじろじろ横眼でこの畫家の素振を見てはひそひそ話をしてゐたが、その一人はだしぬけに大雅に話しかけた。

「旦那、旦那はここまでお出かけでござんすね。」

「私か。」大雅は馬に話しかけられたやうに怪げんさうな顔をした。「私の旅はさういふあては無いのだ。」

「へ、可笑しな旅ですね。」胡麻の蠅は鬚の伸びかかつた願に冷やかな笑ひを浮べた。「それにしては御心配でせう。そんなに大金をお持ちでは。」

「大金を？ 私は大金なき持つては居ないが……」

大雅は大金があつたら、是非購ひたいものの幾つかを腹のなかで考へながら、相手の顔を不

思議さうに見た。二人とも變な顔をしてゐたが、それでも大雅がよく描いてゐるやうな變な顔よりは幾らかましであつた。

「旦那、白くれちやいけませんぜ。」今一人の胡麻の蠅はぞんざいな口をきいた。「金でなくてその錦の袋には何が入つてゐるんだね。」

「ああ、これかい。」大雅はやつと胸の錦の袋に氣がついた。皮肉な笑ひを口も口に浮べながらそろそろ錦の袋を開けにかかつた。胡麻の蠅二人は眼を光らした。大雅は中から古瓦を引張り出した。「お前さん達も、こんな物がお好きだと思はれるな、これは勿來の關の古瓦だが……」

胡麻の蠅は呆氣にとられた。そして古瓦を金に見ちがへた自分達の眼利を恥て、もつと修業しなければならぬと思つた。修業だ。修業だ。修業は大雅にまつても胡麻の蠅にまつても、同じやうにいい事である。

## 美術家と驛長

ウキリアム・チエエスといへば、長らく米國の美術協會の會頭を勤めてゐた、テイントレッツ



トの研究家として名高い肖像画家である。一體米國には、自分の肖像をいつまでも油箱に描き残しておきたい自惚と、畫かきに仕拂ふ謝禮を、さちらともぎつさり持ち合はせてゐる男が多いので、肖像畫の店を張つてゐる畫師も少くはないが、今いふチエエスはそのないかさまなのとは粒の異つた歴史とした藝術家である。

チエエスは先年日本に遊びに來た事があつた。その折の事、この畫かきはある停車場で（この停車場だつたか、畫かきははつきりと其名を覺てゐない。一體畫かきといふものは餘り物覺がよくないやうだ）汽車を待つ間のつれづれに雲を見てゐた。

汽車を待つ間の退屈のぎには、待合に素晴らしい顔でもあつたら、夫を見てゐるのに越した事はないが、そんな顔がなかつたら、雲でも見てゐるよか仕方があるまい。その日は雲が美しかつた。チエエスは歩廊に立つたまゝいつまでもその方に氣を取られてゐた。

そこへだしぬけに貨車がここへ入つて來た。そしてチエエスの立つてゐる直ぐ前で停まつたので、美しい雲は見られなくなつた。藝術家はちよつと舌打ちして外へ歩み去らうとした。すると、目の前に驛長の制服を被た一人の男が立つてゐた。驛長は叮嚀にお辭儀をした。

「あなたは唯今まで雲を御覽になつてゐましたか。」

「見てゐました。藝術家はぶつきら棒に答へた。

「何だつて、そんなに雲を御覽になりますか。」

驛長は自分の女房のだらしない寝顔でも覗かれたやうに胡散さうな眼つきをして言つた。

「私は藝術家です。アメリカ製の藝術家は、きつぱりと言つた。藝術家だつたら、雲を見やうと、動物園を見よう、動物園よりはもつと凄じい驛長の女房の寝顔を見よう、一向掛け構ひはないといつたやうな物の言ひ方だつた。

「藝術家でいらつしやる。すると貴方の前に貨車を引込むのは、以ての外の失禮でした。」

驛長は前よりは一層叮嚀にお辭儀をして、小走りに彼方へ往つたと思ふと、暫らくすると、貨車はまたここを音を立てて、後退りを始めた。

藝術家は呆氣にこられた。そして世の中には親切な驛長もあるものだと思つた。——この驛で、何といふ驛長か、チエエスがこの二つの名を書き落してゐるのは重ね重ね惜しい。



## 蓮のうてな

英吉利のグラスゴウにドナルドソンといふお爺さんがあつた。老病で死にかかつた時、枕もとに媼さんと呼んで言つた。

「媼さんや、お前にはいかにお世話になつたの。俺も今度こそはいよいよお迎ひが来たと思ふからさうせ往かんなるまいが氣の毒なのは、媼さんや、後に残つたお前の身體ぢやてのう。」

「何を言はつしやるだ、後の事なき心配せん……。」媼さんは悲しさが胸に一杯になつて來る様に思つた。「氣をのんびりと持つてゐさつしやれ、病は氣一つぢやさいふ程にな。」

「氣安めは言はん事ぢや。」爺さんは枯枝のやうな手を胸さきで揮つた。

「ところで、媼さんや、後に残つたお前の身體ぢやがのう、一人暮しも辛からうから、俺に遠慮は要らん事ぢや、いい先があつたら片づいての、老先を氣樂に暮らす工夫をせんならんぞ。」

「滅相な、何言はつしやるだ。」媼さんは貞操のかたい蟋蟀のやうに悲しさうな聲で泣いた。「今さら他へ片づくなきと、そない事したら、俺らあの世で二人御亭主を持つ事になりますだ。」

夫を聞くに、病人の爺さんは急に黙つてしまつた。そして吹輪のやうな音をさせて、すうと深い溜息をついた。爺さんの考へでは、亡くなつて後の此の世では兎も角も、あの世で、媼さんが自分より外に今一人の亭主を持つてゐる事は、とても辛抱出来なかつた。出来る事なら、媼さんにさつさり遺産を残して、きれいに寡婦を通させたかつたが、別に怠けたわけでもないのに、さうしたものが爺さんには大して遺産といふ程の物も無かつた。爺さんは空洞のやうな眼をして、じつと考へ込んでゐたが、ふとい事を思ひついたので急に顔ぢうが明るくなつた。「媼さんや、いい人があるわい。お前も知つての那のジョン・クレメンズ爺さんの、あの人がいいわい。あれは人間が親切な上に、神信心しないさうぢやから、お前が片づくのに誂へ向きといふものぢやて。」

「何故の。」媼さんはけけんさうな顔をした。

「考へてみさつしやれ、俺とお前とはあの世で一緒にはなれようのが、不信者のクレメンズ爺さんが天國へ上つて來られやう筈がないからの。」

「なる程な……。」媼さんはそれを聞いて道理至極な事のやうに思つた。それにつけても、そん



な道理至極な事を思ひつく希さんと別れるのは悲しくてならなかつた。だから姫さんは蟋蟀のやうに身をふるはして泣いた。

### 詩人を追出せ

むかし英吉利にスペインサアといふ名高い詩人があつた。この人一代の傑作に「仙姫」といふ長篇の詩があるが、この詩の出来上つた時、スペインサアは誰よりも先きに自分の保護者に見せなければなるまいと思つた。保護者といふのは、その頃の社交界に利け者のサウザンブトン伯爵だつた。

詩人は早速伯爵の玄關を訪れた。そして執事を通じてその嵩高の原稿を伯爵の手もてまでさし出した。伯爵はその折椅子にもたれてほかんとしてゐたらしかつた。で、原稿を受取るに、その場ですぐ読み出したが、詩があまりよく出来てゐるので、急に居すまゐを直しながら、執事を喚んだ。

「スペインサアはさうした、まだ居るかい。」

「はい、あららでお待ちでございます。」

「さうか、うい奴だ。この詩はなかなかうまく出来てゐるわい、褒美として二十磅ばかり取らすがよいぞ。」

「畏まりました。」

執事は叮嚀に頭を下げてさがつて往つた。

伯爵は息も繼がずにその後を讀みつづけた。そして馬のやうに幾度が鼻を鳴らしてみたが、暫くするとまた執事を喚び入れた。

「スペインサアはさうした、まだ居るだらうな。」

「はい、あららでお待ちでございます。」

「さうか、うい奴だ。褒美としてもう二十磅取らすがよいぞ。」

執事は黙つてまた出て往つた。

伯爵は夢中になつて續きに讀み入つた。暫くすると執事はまた喚び立てられた。

「スペインサアはさうした、まだ居るだらうな。」



「はい、あちらでお待ちでございます。」  
 「さうか、褒美としてもう二十磅取らすがよいぞ。」  
 執事は臍に落ななさうな顔をして出て往つた。  
 詩は讀みつけばつぐ程面白くなつた。伯爵はさういふ鐵瓶のやうに痼癢を起して原稿を卓の上へ投げつけた。そして大聲で執事を喚び立てた。  
 「スペンサー奴、怪しからん奴ぢや。早く邸から追ひ立ててしまふがよい。もつと讀んで往つたら、乃公は身代限りをせざるまい。」

芽 張 柳

洋畫家K氏は牛のやうにのつそりしてゐて、おまけに牛のやうに色が黒いので聞けた男である。ある時K氏は他から芽張り柳の畫を頼まれた事があつた。  
 「芽張り柳——といふと、芽を吹き出した柳ですな。よろしい、あまりお急ぎでなかつたら描

いてあげませう。」  
 K氏はゆつくりした調子で返事をした。そして客が歸つた後で、何氣なく縁側へ出て見ると、梅がちらほら咲きかけてゐるのに氣がついた。  
 K氏は考へた。梅が咲くからには鶯も来るに相違ない、鶯が来るからには、燕だつて来ない筈はなからう。してみるに柳もそろそろ芽を張つてゐるかも知れない。  
 「さうだ、柳も芽を吹いてゐるかも知れないぞ。」  
 K氏はいつに似げなく慌てて、加茂川の川つ縁に出てみた。  
 案に違はず、柳はそれぞれ芽を吹いて、春の支度に忙しさうだつた。實際畫家にとつてこんな都合な法はなかつた。芽を出すなら出すで、一應畫家に下相談をしてからにしたつて、遅くはなかりさうなものだ。  
 身勝手なのは、唯それだけではなかつた。そこらに立つてゐる柳といふ柳の恰好は、これもこれもK氏の氣に入らなかつた。あるものは後期印象派の若い洋畫家のやうに、K氏の方に尻を向けて衝立つてゐた。またあるものは未來派のやうに、顔を突き出してこの畫家に喧嘩腰で



みた。

「さうもいかん、みんな形が書になつてゐない。」

K氏はぶつぶつ呟きながら川つ端を下つて來るも、漸と二三本舞妓のやうな恰好をしたのが見つかった。

「うむ、これならよかりさうだ。」

K氏は早速繪具箱をあげて寫生にかかった。

K氏は毎日柳ばかりを寫生してゐるわけにも往かなかつた。畫家にも色々俗な用事はあるものだ。K氏は精々閑をこさへては、川つ端へ出掛けて往つたが、格別急がうごもしないで、のつそりとしてゐるので、其畫が出来上つたのは、寫生を始めてから恰度三十日ばかり経つてゐる頃だつた。

註文主は畫家の手から其油畫を受取つたが、ちらと畫面を見ると、其儘黙つて押もへした。

「先生私がお頼みしましたのは芽張柳の畫でしたな。」

「さうです、確に芽張柳でしたよ。」

「でも、先生、この畫は芽張柳ぢやなうて、青柳さすな。」

K氏は吃驚して自分の畫を覗き込んだ。成程柳にはこんもりと葉が繁つてゐた。K氏が寫生にひまきつてゐる間に、柳の方では又しても畫家に相談なしで、勝手に葉を伸ばしてゐたのだつた。

奇

癖

小説家のH氏は今は何うか知らないが、以前もつと若かつた頃には、他家へ訪ねて往つての歸りに、門口の戸をがらつと開けて表へ出ると、その儘さつさと歸つて往つたもので、決してその戸を閉めておくやうな手数のかかる事はしなかつた。

「何だつて君は門口の戸を締めないんだね。」

それを氣にした友達一人が、ある時不思議さうに訊いた事があつた。すると、H氏は一度胃の腑へ嘔みくだした門も、門の戸も吐き出すやうな調子で返事をした。

「門口の戸かい、あれは僕が出入するのに、開けなければならぬから開けはするが、締める



「必要なちつとも無いぢやないか。」

むかし英吉利にH氏と同じ様な皮肉家にスキフトといふ男があつた。家事一切は女中まかせに何一つ口を出さうとしなかつたが、唯一つの癖は戸の開閉がおそろしく口やかましい事で、どんな場合にでも、これだけは嚴重にしないと、直ぐ機嫌を悪くした。

ある時、女中の一人が、かなり遠い田舎町にゐる姉が結婚するので、是非その席へ顔出ししなければならぬから、一日だけお暇が許して貰ひたいと言ひ出した。主人のスキフトはすぐに承知した。

「それはめでたいの。ゆつくり往つて来るがいい。幸乃公の馬もあいてるから、那に乗つて往くとしたらさうぢや、馬丁に案内して貰つての。」

「ね、あの馬をお貸し下さいますか、それに馬丁さんまで……まあ、旦那様お有りがたうございます。」

女中は身體を折釘のやうにしてお辭儀をしたが、その儘主人の室を飛び出して、直に支度に懸つた。

馬の用意は出来た。女中は主人の背に上つたやうな氣持で馬に乗つた。そして途々何と云ふ親切な旦那様だらう、こんな好い方ならいつそ結婚してあげてもいいと思つてゐらしかつた。暫くすると、遙か後から呼びかけて来るものがあつた。女中も馬丁も馬も一緒にあゝを振りかへつた。追ひかけて来たのは下男の一人で、旦那様の御用だから今一度邸へ歸つてくれといふのだ。女中はぶつぶつ呟きながら歸つて来た。そして膨れつ面をして、主人の室へ入ると、スキフトはじろりと横目でにらんだ。

「その戸を締めて往きなさい。」

女中は馬に乗つて結婚式に出かけられる嬉しさに、つい戸をしめるのを忘れてゐたのだ。

### 文豪と旅宿の亭主

英國の文豪キプリング氏の邸前に美しい並木があつて、主人が自慢の一つになつてゐる。ところが、この頃になつて急に樹に元氣がなくなつたので、何うした事かと、よく調べて見ると、隣の旅籠屋から出入する馬車の故で、車の肩が突き當る度に、樹肌が擦りむけてゐたのだと判つた。



キブリングはぶつぶつ呟きながら、隣の主人あてにこれからは少し気をつけてくれるやうに手紙を書いて出した。旅籠屋の亭主はそれを受取つて讀むと、すぐ自分の家に泊り合はせてゐる客の一人をたづねた。

「旦那、あなたはキブリング先生の書いた物をお購ひになりませんか。あの先生の物は滅多に手に入らないつていふ事ですが。」

「キブリングさんの手蹟かい。客は聲をはずませた。

「有るなら譲つて貰ひたいもんだね、かねがね欲しいと思つてたんだからね。」

「ぢや、お譲りませう、やつと今手に入つたところですが。」

旅籠屋の亭主はたつた今受取つたばかりの文豪の手紙を賣りつけた。そして代りに十シルリングの銀貨を受取つた。

文豪は隣りから一向返事が来ないので、眞紅になつて怒つた。そして今度は火のやうな手紙を書いて送つた。

旅籠屋の亭主はその手紙をまた泊り客の一人に賣りつけた。そして一磅の金を取つてポケ

ットにしまひ込んでしまつた。

キブリングは幾日経つても返事が来ないので、さうと業を煮やして隣へ出かけて往つた。

「御主人、お前さんのところへ、こないだから二度ばかり手紙を出しておいたが、受取つてくれませんか。」

「はい、確に拜見しましたよ。」

旅籠屋の亭主は、銀貨と金貨とをポケットにしまひ込んだのと同じ手で顔を撫まはした。

「ぢや、何だつて返事をくれない。文豪はぶりぶりして言つた。

「でも、先生、私の方では毎日でもお手紙が頂きたいんです。」隣の亭主は揉み手をしながらお辭儀をした。

「馬車でお客を送るよか、その方がずつと商賣になるもんですからな。」

### 無學なお月様

N氏は奈良女子高等師範の校長である。東京にゐる頃にはさうも思はなかつたが、住むで



る。奈良は景色がよく、景色がよくないところには定つて古蹟があつて、遊ぶには恰好な土地だ。N氏は思つた。それにつけて、かういふ結構な土地に来て、鹿のやうに柔和で、鹿のやうに尻尾の短い女學生を預つてゐる自分の身の幸福を思ふらしかつた。

N氏は晩餐がすむと、毎晩のやうに奈良公園へ散歩に出た。ある晩の事、いつものやうに女子教育の事を考へながら（ニイチエだつたか、女をしつけるには鞭を忘れなと言つたが、N氏は鞭らしいものを持つてゐなかつた。多分忘れてゐたのに相違ない。公園のなかをぶらぶらしてゐた。すると、いつの間にか黛さんだ春日の杜にのつそりと大きな月があがつてゐた。

「や、月が出てゐる。ちやうど十五夜だな。」

と、立ちどまつて珈琲皿のやうにまん圓く、おまけに珈琲皿のやうに冷たいお月様を見てゐるうち、N氏は何だか歌よみらしい氣になつた。

N氏はチウイング・ガムを噛むだ折のやうに、口のなかから變な三十一文字を吐き出した。

「天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも」

いい歌だ、いい歌が出来たものだと思つて今一度よみかへしてみると、夫は自分の歌ではなく、百人一首に出てゐる名高い安部仲麿の作だつた。

N氏はその歌を繰りかへしながら、じつと空を見てゐると、肝腎の珈琲皿のやうなお月様が三笠の山の上に出てゐない事に氣がついた。

「をかしいね。三笠の山に出でし月かもといふからには、ちやんと三笠山のでつべんに出なければならん筈ぢやないか。それにあんな方角から出るなんて。」

實際N氏の立つてゐる所から見ると、月は飛んでもない方角から出てゐた。三笠山は何か後暗い事でもしたやうに、黛さんだ春日の杜影に圓い頭を窄めて引つこんでゐた。

夫から後といふもの、N氏は公園をぶらつく度に方々から、頻りに月の出を調べて見たが、無學なお月様は、仲麿の歌などに頓着なく、いつも外の方から珈琲皿のやうな圓い顔をによつきりと覗けた。

「やつぱり間違だ。仲麿め、いい加減な茶羅つほこを言つたのだな。」

N氏は自分のやうな眼はしの利く批評家に出會つたら、仲麿もみじめなものだと思つて得意



さうに微笑した。そして會ふ人ごとに夫を話した。すると大抵の人は「なる程な。」と言つて感心したやうに首を傾げた。N氏に教へる。それは月が年が寄つたので、月も年がよると變な事になるものなのだ。ちやうど教育家のやうに……

### 詩人と百姓婆さん

ヘンリー・ヴァン・ダイク氏といへば亞米利加では第一流の學者として、詩人として聞かれて居る老人である。去年だつたか娘をつれて日本へ遊びに来たが、其の節日光を見た詩を本誌へ寄稿した事があつた。詩はとり立てていふ程の立派な出来ではなかつたが、それでも亞米利加人の詩としては巧いと思つた。

その時は丁度、同じ亞米利加から、實業家のヴァンダリツプ氏一行が来て、盛に日本人に歓迎されて居た時なので、ヴァン・ダイク氏の事は一向世間の噂に上らなかつた。世間の噂に

上らなかつたからといつて、馬鹿にするものではない。むかし政治家のグラッドストーンと詩人のテニスンとが連立つてオックスフォード大學かどこかに講演に行つた事があつた。その折グラッドストーンは、聴衆に向つて、自分の政治家としての仕事は派手なやうだが、すぐ世間からは忘れられる。テニソンの事業は地味だが、永久に残るといつたものだ。グラッドストーンめ、煙草好きで、正直者で通つたこの詩人に、一寸お世辭をいつたのだらうが、それにしてもこのお世辭には眞理がある、(尤も永久に残るといつたところで、唯残るといふだけでは、案外詰らないかも知れない。)

このヴァン・ダイク氏が或る時南の方へ旅行した事があつた。その折この詩人は汚い百姓家の入口に、老つた一人の印度人の婆さんが、だらしなく蹲踞んで薄汚い粘土製のパイプを啣へてすばすば煙草を吹かして居るのを見た。

「婆さん、お前煙草が大層好きだと思はれるな。ヴァン・ダイク氏はここに笑顔を作つて肩越しに婆さんを覗き込んだ。だが、そのパイプは少し汚な過ぎるやうだな。」

「婆さんは皺くちやな顔を上げて詩人を見た。」



「旦那、汚ないといはつしやりますか。その筈だての、俺ら日がな一日すばすばやつてるのだから。」

婆さんの息は詩人にとつて堪へられない程煙草臭かつた。詩人は顔をしかめ乍らいつた。

「そんなに煙草が好きなのかい。だが、パイプだけはよく掃除しなくちや。さもないと口が臭くつていけない。」

「口が臭くたつて構はねわだ。」

婆さんは不機嫌さうに鶏のやうに口を尖らした。

「でもさ、詩人はお愛想ぶりに婆さんの肩を叩いた。

「死んで天國へ行くのに、息が臭くては困るぢやないか。」

「何をいはつしやるだ。」婆さんはてんで相手にしないやうにせせら笑つた。「俺ら死ぬる時には息を引取りますででの。」

ヴァン・ダイク氏は何とも返事のしようがなかつた。で、ステッキを振つて婆さんの傍を去つた。すべて負けた時には成るべくその場を外した方が結構である。

## 蛇

春が暖かくなるにつれて、蛇がそろそろ穴から這ひ出すやうになつた。今日は一つその蛇の失敗ばなしをここに御披露する。

京都の某畫伯の數多い門弟のなかで、誰の眼にも一番光つて見える人にK氏といふのがある。

K氏は實際わらい、畫も上手に描くのみならず、他の人が二本の脚でする旅行をも、氏は平氣で一本脚でするからである。

K氏は子供の時から足が悪かつた。で、坐つてゐて出来る仕事は無からうかと思ひついたので繪の道である。もしか性來脚が達者だつたら、氏は畫かきになぞならなかつたかも知れなかつた。だが、繪の方がだんく巧くなつて來ると、氏は多くの畫かきのする寫生旅行といふものが仕てみたくなつた。それには悪い脚が邪魔になつた。で、氏は思ひきりよく、その悪い方の脚を一本切つて捨てた。——世間には他人の有だつたら、手だらうが、脚だらうが、平氣で切つて捨てる醫者といふ職業人がゐる。



去年の事だつた。K氏は義足をつけて、同門の人達と一緒に日本アルプスへ寫生旅行に立つた。いよいよ山にかかるに、仲間は足弱のK氏に構つてゐなかつた。彼等は山へ寫生に來たのである。もつと眞實の事をいふと、文展向きの繪になる景色を捜しに來たのである。だが、困つた事には神様が山をお拵へになつた時には、まだ文展といふものが無かつたので、山にはそんな用意はすつかり缺けてゐた。で、畫かき達はK氏を置いてきほりにしてぐんぐん奥へ入つて往つた。恰度文展でいつもK氏に置いてきほりを喰はされたやうに。

K氏は義足を曳きすりながら、よちよち後から登つて往つた。うしろには強力がついてゐた。ごろた石の多い峠道へ來ると、熊笹のかけからいきなり飛出して來たものがある。あつと言ふ間にK氏の片足へ噛みついて、そのまま電光のやうに消れてしまつた。

「や、蝮だ。旦那やられましたな。強力は顔色を變へて飛んで來た。早く手當をなさらないければ……」

「なに、構はない。K氏は平氣で歩みを續けた。

「馬鹿な蝮だよ、俺の身體が不死身だつてね事にちつとも氣がつかないんだね。」

「でも、旦那、相手は蝮ですからね。」強力は胡散さうな眼をして、後から氣をつけて畫かきの容子を見てゐたが、畫かきの脚は少しも痺れたらしい風は見なかつた。

蝮の馬鹿め、つい見さかひもなくK氏の義足の方へ噛みついたのだつた。

### 毬を返せ

一七四〇年、獨逸聯邦が騒いだ。そのささくさ紛れに、普魯西のフレデリック大王は、シレイジャの土地を、奥太利の女帝マリア・テレサの柔かい手から引つ手繰つた事があつた。ちやうど其頃フレデリック王が自分の部屋で何か類と書き物をしてゐると、ふだん可愛がつてゐる甥の一人が入つて來て、卓子の側で毬投げを始めたものだ。

英國の詩人テニスは自分か詩作に夢中になつてゐる時、女中がばたばた足音を立てて入つたからといつて、急に痲癩を起して、インキ壺を投げつけたといふ事だが、フレデリック大王は、詩人よりは幾らか辛抱強かつたといふ見えて、そんななかに平氣で書き物をしてゐたが、さうした機みか甥の投げた毬が、間違つて王のよりかかつてゐる卓子の上に落ちて來た。王は一寸ペン



を止めて、毬の方へ目を逸らしたが、指先でそれを押しつける。黙つてまた書き物を續けた。こゝ、間もなく毬はまた卓子の上へ落ちて来た。そして道徳家のやうに四角い顔をしてゐるインキ壺に戯けかかった。王はそれを押へて、甥の方へ投げかへしてやつたが、その途端、白い眼をしてちらと睨んでみせた。甥は一寸お辭儀をした。

「小父さん、御免なさい、これから氣をつけますから。」

暫くすると、毬はまた卓子の上へ落ちて来た。そして普魯西の英雄にからかひでもするやうに、二三度王の鼻つ先きでびよんびよん踊つてみせた。王はやにはに夫を引つ摺むで、自分の隠しの底へつつ込んでしまつた。甥はそれを見るに、濟まなさうに擦り寄つて来た。

「小父さん、御免なさい。僕お詫をしますから、毬を返して下さい。」

小父は氣むつかしい顔をして、せつせと書き物をしてゐるが、さうしても毬を取り出さうとしなかつた。

甥はいつまでもねだつてはゐなかつた。暫くすると、思ひ切つた顔をして王の前に立つた。そしてきつぱりした調子で言つた。

「小父さま、あなたにお伺ひしますが、毬はお返し下さるんですか、下さらないんですか。」

小父はぎよつとした氣味で、小さな甥を振むいてみた。そして涙ぐんだ眼のうちに、王であらうが、誰であらうが許すまじき力を見つけた。王は急に顔色を和けて、隠しから毬を取出してくれた。

「うい奴ぢやのう、それ毬は返してくれるぞ。其方が居るうちは、シレイジャも先づ安心だといふものぢや。」

### 五千弗の提琴

いつだつたか大阪に來た事のある露西亞の提琴弾きピアストロ氏は、十萬圓の提琴を持つてゐるといふので名高かつた。十萬圓の現金をもつてゐるといふのに比べるに、それだけの提琴を持つてゐるといふのは、何だか一寸奥ゆかしい點が無いでもない。

ピアストロの夫は比べ物にならないが、ヴァイオリといふ名高い提琴弾きも、五千弗の



提琴をもつてゐるので名高かつた。ある時オウシオン・グロオヴで、その提琴で演奏會を開くことになつた。値の高い樂器からは、美しい音がするものだと思ひ込んでるらしい音樂好きは、その日になるに吾れ勝ちに會場に押しかけて來た。

暫くすると、この名高い提琴は、客の前に現はれた。そして弓を取りあひる勢よく弾き出した。その音といつたら美しい女の嘔り泣きをするやうな調子で、聽衆は誰一人今日までこんな美しい音樂を耳にした事はないらしかつた。

「さすが五千弗の提琴程あつて、何とも言へませんな。」

勘定高い聽衆の誰彼は、弓のさきから、金貨が一つ宛零れおちるやうに思つて、腹の底から揺り動かされた。

暫くすると、この提琴ははた弓の手を弾き止めた。そして樂器に何か故障でも起きたらしく、幾度か調子を直さうとしてゐたが、何うも思ふやうにならないので急に痙攣を起した。そして樂器を取り直したと思ふと、暴に椅子の背に叩きつけた、樂器は女に驅された男の心の臓のやうにこなこなになつて碎けてしまつた。

聽衆は越瓜のやうに眞つ青になつて顛へた、暴な音樂家もあつたものだ。我鳴りちらしてゐる男もあつた。美しい娘をもつた母親は、こんな事があつても音樂家になぞ娘は呉れてやるまい、さもないと、さうかすると、朝の珈琲がうまくないからと言つて、娘を椅子の背に叩きつけないものでもないと思つたらしかつた。

すると、司會者が現れた。そして騒ぎ立てる聽衆を制しながら、諸君は眞つ青になつてお驚きのやうだが、今毀したのは五千弗の提琴ぢやない實は一弗六十五仙の安物に過ぎない、これからお聴きに達するのが、名高い例の提琴である。斷りを言つた。

聽衆は聲をたてて笑ひ出した。だが、音樂家が弓を取るに、すぐに鎮まりかへつて耳をすました。成程結構な演奏ではあるが、さうかといつて、一弗六十五仙の先刻の提琴と比べて、音色に格別の異ひはなかつた。それについても聽衆も思つた。音樂のいい悪いは樂器の故ぢやなくて、音樂家の腕である。

日本の音樂家が五千弗の樂器を持たないのは聽衆にとつて幸福である。そしてもつて幸福なのは、そんないたづらをする程音樂家の腕が冴わてゐない事である。



王様と上布

伊太利の王イマニユエルがある時、旅の途すがら名もない田舎町に泊つた事があつた。町の人には名高い王様のお成りだといふので、態々心をこめてごんちんかなおもてなしをして、王様の御機嫌をとつた。

まづい食事がすむと、王様は眠より外には仕方がなかつた。王様は寢床にはいつた。寢床は粗末な拵へだつたが、上布だけは新しい、おろしたての雪のやうに眞白な布だつた。王様は木の片か何ぞのやうに、無難作にそのなかに身體を横へた。

王様は幾度か寝がへりを打つた。寝ぐるしい晩で、王様は國の事や、皇后の事や、馬の事を考へることもなく考へた。皇后が馬のやうに尻尾をふつたり、馬が一錢銅貨のやうに平べつたくなつたりしたと思ふと、つい何事も判らなくなつた。王様は漸と寝つく事が出来たのだ。すると、だしぬけに室の入口の扉をどんとどんと叩く音がした。

イマニユエル王は子供のやうに睡さうな顔を、半分ばかり寢床から持ち上げて見た。入つて

来たのは宿の亭主で、胸には折目のついた清潔な上布を大事さうに抱へてゐた。

「王様、お邪魔をして相済みませんが、一寸上布を取り替へさせていただきます存じま

す。」

亭主は鄭寧にお辭儀をした。

「上布か。上布だと新しいやうだが……」

王様は重い臉をこすりこすり、やつとこゝろで寢床から起きた。亭主は手ばやく上布を置きかへて往つた。

王様は轉け込むやうにその上に横になつた。そして毀れた玩具のやうにだらしなく手足を投げ出したと思ふと、そのまま、また駢をかき出した。

物の一時間も経つたと思ふと、王様は室の扉がまたどんとどんと鳴つてゐるので目がさめた。暫くすると以前のやうに眞白な上布を胸に抱へた亭主が、幽霊のやうに足音も立てないで、そつと入つて来た。

「王様、毎度恐れ入りますが、また上布を取り替へさせていただきます存じまして。」



名 換 摺 二 二

アメリカの上院議員の某が、女房を連れてバルチモアへ遊びに出かけた事があつた。女房は名高い女権論者だつたから、いくら自分の亭主だつて、「連れて」と云はれると、膨れつ面をするかも知れないから、そんな折の爲めに「一緒に行つた」と云ひ直して置く事にする。

「上布だも、やつと今取替へたばかりぢやないか。」  
 王様はふくれ面をして呟いた。  
 「でも、汚れてゐては失禮でございますから。」  
 亭主は王様が起き上ると、手早く上布を取かへた。  
 「何だつて、そんなに度々上布を取り替へるんだね。」  
 王様は幾らか不機嫌らしく訊いた。  
 「でも、この邊の下世話に、上布は自分のためには七日目に、お友達にはその日その日に言ひますから、王様には一時間ごとに取かへなくつちやと存じますして。」

二人は日が暮れて、ワシントン市に歸つて來た。家に着くと、女房は何か忘れ物でもしたらしく、そこらを探そうと捜しまはつてゐたが、急に主人の方へふり向いて訊いた。  
 「あなた、わたしの蝙蝠傘はさうなすつたの。」  
 「蝙蝠傘？知らないよ、そんな物。」と主人は此の世に蝙蝠傘といふ物の存在を知らないやうな調子で云つた。  
 「まあ、驚いた、さつき汽車の中であなたにお渡したぢやないの。」  
 「さうさう、そんな事があつたつけないあ。」  
 と、主人は獨立戦争時分の事でも思ひ出さうらしく、額に手をあてがつた。「なる程蝙蝠傘は確かに俺があづかつたよ。」  
 「ぢや、さうなすつたの。」  
 主人は上着を脱ぎさしたまま考へ込んだ。  
 「困つたな、して見ると、汽車の中へ忘れたかも知れないぞ。」  
 「まあ、汽車の中へ。」女房は螳螂のやうに肩を聳やかした。



「Gaietyのうららしいよ。」

「よくそんな事が云へますね。」と女は大聲でわめき出した。「あなたは上院議員ぢやなくつて。婦人の蝙蝠傘一つ始末が出来ないものが、よく國政が料理して往けますね。」

主人は斯うきめつけられて、ぐうの音も出さず、失くなつた蝙蝠傘のやうに、眞つ直に衝つ立つてぶるぶる顛へて居た。

クレオパトラやマクベス夫人に扮して名を賣つた英吉利の女優ラングトリ夫人が、まだ若盛りの頃ある宴會で、其の頃ちやうど倫敦を訪れて來た阿弗利加の或る王様と一緒になつた事があつた。

女優は燒栗のやうに色の黒い王様の御機嫌を取らうとして、いろんな愛嬌を振舞いた。王様はすつかり上機嫌になつて、ここにこしてゐたが、歸り際に大きな手を出して眞珠のやうな可愛らしい女優の手を握つた。そして精一杯のお愛相をぶちまけた。「夫人、もしか貴女のお顔の色がもつと黒くて、そしてもつと肥れて居らつたら、私、あなたの爲めに自分の國をも投げ出すんですがね。」

### 世界一の名醫

北京に住むでゐる或る亞米利加人が、支那人を相手に、

「お國も悪くはないが、唯病氣の時だけには困つちまふ、信用の出来るいいお醫者がゐませんか。」

と、しみじみ閉口したやうにこぼした事があつた。すると支那人はむきになつて雀のやうに唇を尖らせた。

「いいお醫者ですつて。いい醫者なら支那に無い事はありません。恐らく世界ぢゆうで、一番いい醫者が居るのは支那でせう。韓璋つて、あなたも御存じでせう。那の人なぞもいいお醫者の一人ですよ。私には生命の恩人ですからね。」

「ほう、生命の恩人だと仰有るか。」件の亞米利加人は、支那に生命といふものが唯の一つでもあるのを、そのまた生命を弄らうといふお醫者があるのを不思議でならないやうに言つた。

「見立てでも上手なんですかい。」



「いや、理由をいふと憚うなんです。いつだつたか私がひどく加減を悪くした事がありましたね。支那人は歴史家のやうに眞面目くさつて話し出した。「私は早速懸念の洪庚といふ醫者を迎へにやりました。洪さんは薬をくれました。私はそれを飲むと、加減がなほ悪くなりました。で、宋森といふ外の醫者をまた喚びました。宋さんはもつとさうり薬の分量を飲ませました。が、病氣は悪くなる一方で、私はもうこれが自分の最後だと思ひました。で、駄目だと思ひましたが、その韓璋さんを招んで貰ひました。韓さんはそんなだつたら乃公が往つても、もう駄目だらうからつて、來てはくれませんでした。お蔭で私は生命拾ひをしました。」

「成るほい、名醫だ、名醫だ、これが名醫でなくつて何だらう。」と亞米利加人は泣き出しさうな顔をして笑ひ出した。

## 書肆と作家

米國のカリフォルニア州にある本屋がある。小説家ウキンストン。チャーチルが甚く好きで、お客が何か小説本の面白いのは無いかと訊くと、

「いただきますとも、チャーチル先生の新版物で、無類飛切といふのがござります。」と、直この作家の小説を賣りつけようとする。で、數ある本屋のなかで、チャーチル物の賣高にかけては、いつの月も記録を取つてゐるのはこの本屋だ。

ある時チャーチルがカリフォルニアに旅行をした事があつた。小説家の友人は、この機會を外さないで、作家と本屋とを結びつけようと思つたので、豫めその由を通じると、本屋は畫のやうに羽叩きをして喜んだ。

「結構ですな、かねて崇拜してゐる先生にお目に懸るなんて。だから本屋商賣は止められませぬのや。」

本屋は、お愛相のつもりで、チャーチルの作物は何一つ残さず讀んだ。なかには十回も繰返したのがあると言つて附足した。そして腹のなかでは、もしか夫に少しでも懸値があつたにしても、そんな事は後からすぐ辨償出来ると思つてゐらしかつた。

本屋は小説家に紹介はされた。チャーチルはにこにこ顔で本屋の手を握つた。

「君に聞きますと、大層私のものが好きださうで、大きに有難う。」



「いね、何う仕りまして。……」本屋は恚う言つたきり、あごの言葉も次がないで、じつとチャールルの顔を見つめた儘ほんやりしてゐた。小説家は幾らか手持不沙汰な思ひをしつらしかつた。

チャールルを宿屋に送り込んだ紹介人は、歸りに本屋の店を覗いてみた。本屋は椅子に凭れて籠のカナリヤを逃がしたやうな、浮かぬ顔をしてゐた。

「さうだ、愉快だつたかね、先生に會つて。」

「いや、はや。」と本屋は紹介人の聲を聴くと、椅子から立ち上つて來た。「チャールル先づつて、あんな顔をしてる方なんですか、ほんまに失望しましたよ。結局お會ひ申さなかつた方がさ程良かったでせう。」

困つた事には本屋はそれ以後餘りチャールル物を買らうとしなくなつたさうだ。

### 劇作者と舞臺監督

日本の芝居では、近頃見物がこれまでの出し物に飽きて來たところから、頻りに新作を歓迎し

て、書きおろし物とさへいへば、こんな拙いものでも板に上せてゐるので、一つ二つ自分の作が演ぜられると、もういつばしの劇作家か何そのやうに氣取つたものの言ひ様をする新作家が、そこらにちよいちよい見つかるやうになつた。ほんまにめでたいことである。

それは異つて、これは亞米利加の話であるが、あちらにダビッド・ペラスコといふ舞臺監督がある。ある日豫て見知り越しの男が訪ねて來たので、舞臺監督はきさくに會つてみた。その男は言つた。

「私の友人のスミスといふ男が、こないだ三幕物の喜劇を御覽に入れた筈ですが……」

「いね、そんな事がありました。あの方があなたのお友達でしたか。」舞臺監督は上等の葉巻を吹かしながら言つた。

「その喜劇は一昨晚でしたか、あの方に本讀みしていただきました。承はつたのは私と俳優二人と都合三人でしたつけ。」

「本讀みの結果はさうでした。お氣に召しましたか。」

お客は氣づかはしさに相手の顔を見た。これまで數へ切れなほさ度々そんな眼つきで顔



を見られた事のある舞臺監督は、こんな場合にはどうしたらいいかといふとをよく知つてゐた。それはしきりと葉巻の煙を吹かしながら、せいせいかけかまひのない顔をしてゐればいいといふことだ。

「お氣に召しましたか知ら。」客は言ひにくらうに言つた。

「正直にいふと……」舞臺監督は強て正直らしい口もをしながら答へた。

「私達三人の意見は、あのなかで一幕は無駄だといふ事に一致してゐました。」

「はあ、さうでしたか。して、どの幕が無駄だとお考へになりました。」

その男は舞臺監督の氣になつて、板に上すことが出来るのだつたら、友達の仕事に勤めて、一幕位はどんなにでもして刈りこましてもいいと考へてゐるらしかつた。

「この幕つておつしやるのですか……」舞臺監督は氣の毒まうに言つた。「ところが私達の無駄だといふ幕は、三人が三人とも異つてゐるんですからね。」

### 文豪の原稿

紀州に光明寺といふ黄檗の寺がある。その開山は圓通といふ草書に巧な坊さんだつた。あの人がこの坊さんから手紙を貰つたが、どうしても読み下しにくい箇所があるので、わざわざ光明寺を訪ねて、和尚にその手紙を見せたものだ。すると、和尚は幾度か繰かへしてその手紙を讀んでゐたが、どうも投げ出すやうに、

「わしが書いたには相違ないが、どうにも読み下しやうがないわい。幸弟子にわしの書いたものをよく讀みわけるのであるよつて、そいつに見せたがよからう。」

と言つたさうだ。こんな風に自分で自分の書いたものが讀めないのも少くなくからうが、トルストイの原稿なども、夫人の外には讀みこなす人が少く、印刷所の植字工などの手にはとてもおへなかつたので、この人の原稿はすつかり夫人の手で書き直されたといふことだ。

「紅文字」の著者ホウソルンもする分わからない文字を書いた人で、この人の遺稿にはかなり價值のあるものも遺つてゐるが、それが今だに出版せられないのは、誰一人十分讀みこなせる人が居ないからださうだ。カアライルも名高い悪筆家で、この人の原稿にはどんな植字工も困らされたものだ。ある時倫敦の印刷屋が蘇格蘭からすてきに腕の優れてゐる植字工を一



人よんで来た。仕事始めに職工の手に渡されたのは、外でもないカアライルの原稿だつた。すると、それを一目見た職工はうなされるやうな聲を出した。

「また此奴に出會はしたんだな。」

職工はいきなりその原稿を卓子の上に叩きつけた。「此奴から逃げ出したいばかりに、わざわざ倫敦下りまで出掛けて来た俺ぢやないか。」

## 夏蜜柑

日本の宴會には、よくお客同志の餘興盡しといったやうなものがあつて、それがあつたために自分の隠し藝を、人前に押し賣りをする事の出来る楽しみもあるが、さうかすると、自分が藝無しのために飛んだ恥をかかされるこゝろがよくある。亡くなつた山路愛山が、ある時何かの宴會で相客からうるさく隠し藝をせがまれて、例の負け嫌ひから、丁度夏座敷だつたので、女中に臺所から冷し素麵の桶を持ち込ませて、それをいきなり頭からひつかぶつて、素麵の雨の中から鶯鳥のやうな苦しい聲を振絞つて

Cartze Chy Carlyle

「これは鯉の漉のほりではないか。」

といつたさうだが、お蔭で座敷は水だらけになつて、一座は白けてしまつたさうだ。

最近日佛交換展覽會の用事をすませて、佛蘭西から歸つて来た美術批評家のK氏が、まだ若盛りで、白馬會の仲間達と一緒ににはしやぎまはつてゐた頃、こんなこゝろがあつた。それも宴會での出来事だつた。

K氏は人も知つてゐる通り口が大きく願が突つ張つて、俗にいふわらの出た顔で、あんぐり口を開いたら、ラルウスの佛語辭典でも詰め込めさうな大きさである。宴會の藝つくしは廻り廻つてK氏の番になつた。氏はやをら座を立て座敷の真中に坐つた。そしてポケットから大きな夏蜜柑一つ取り出して掌面にのせた。

「お目通りが叶ひましたら、これからこの夏蜜柑を丸ごと口の中に頬張つて御覽に入れます。」

かう言つて、K氏は件の夏蜜柑をそろそろ口の中に押し込みかけた。皆はをかしさに手を打つて笑ひ興じた。K氏の口も大きかつたが、夏蜜柑はそれよりもまだ大きかつたので、七分がた口の中にはいりはいつたが、残りの三分がまだ齒の外にはみ出してゐた。



「君もつとしつかりやつてくれ、まだ半分ばかり残つてゐるぢやないか。」  
誰かが戯談半分に傍から喚いたものだ。すると、酔つたまぎれのK氏はいきなり拇指をもつて蜜柑をむりやりに口の中に押し込んでしまった。

「あざやかだ。あざやかだ。」

皆がやんやん褒めそやすと、それにつれてK氏は二三度手をふつて踊るやうな真似をしたが急に息づまりさうになつたと見えて、両手の指先を口の中に突つ込んで蜜柑を取り出さうとするらしかつたが、口一ぱい咬つた蜜柑はさうしても取り出しやうがなかつた。見てゐるうちに、K氏の顔は眞青になつた。額からは汗がたらたらと流れた。鼻は輔のやうに激しい息を吐いた。皆はうろたへ出した。

「駄目だ、駄目だ、前歯をすつかり抜かなくちや駄目だよ。」

「背中を金槌でぎやしついたら、一息に吐き出さないかしら。」

「こりやめても駄目だ、助かりつこはない。早く親類にでも知らせてやらなくちや。」  
こんな風な言葉が邊りから取り交はされた。K氏の眼からは涙が流れた。鼻からは涕が流

れた。口からは涎が流れた。美術批評家の最期は、こんなに惨めで、こんなに滑稽なものかと思はれた。すると、今まで黙つて見てゐた知慧者のM氏がついと立ち上つたと思ふと、ポケットから鉛筆削りの小刀を取り出して、いきなりK氏の口の中に突つ込んだ。

「危ない。何をする。」

「かうするんだ。」M氏は外科醫のやうに落ちつき拂つた態度で、夏蜜柑の肉を切り取つて夫をK氏の口から引つ張り出した。こんな事を二三度するうち、口の中が漸とゆとりがつくやうになつた。K氏は指を突つ込んで残つた夏蜜柑の臟腑をやつとこさで引き出すことが出来た。

お蔭で生命だけは取り止めた。それ以來K氏は夏蜜柑の顔を見ると、急に蟲がかぶるやうに顔を眞青にするやうになつた。

### 御寝間の埃

佛蘭西のルイス十五世の皇后が、ある時ふだん自分のあまり使つたことのない公式用の寢臺の上に、小さな埃を見つけたことがあつた。皇后は一寸美しい眉を寄せた。時を移さず皇后宮



大夫は御前に呼び出された。皇后は黙つて可愛らしい指でその埃を指さして見せた。皇后宮大夫は二三度お辭儀をしたと思ふと、次に控へた皇后宮附の御寢間係を呼出した。御寢間係はその埃を見るに、顔を眞赤にしてそのまま御前を下つて行つたが、一時間程経つと國王附の御寢間係を連れて来たはいつて来た。そして御寢間の上に残つてゐる件の埃を見せて、一刻も早く取りのけた方がいいと、權柄づくに言渡した。國王附の御寢間係は頭を横にふつた。

「そんなことは私の仕事ぢやありません。私は職責として皇后の宮の御ふだん用の御寢間こそ手にかけてゐますが、公式用の方は私がお觸り申すことすら出来ないことになつてゐるのですから、この始末はごなたか外の方であります……」

皇后の宮はその言葉に一應道理があるやうに思はれたので、誰が係なのか、それをよく吟味して、その者に件の埃の始末をさせるやうに仰せられた。その後係の者を調べるためにいろんな會議が開かれて、二月ほごむだな月日が経つた。皇后の宮は大夫を召出されて、埃はいつなつたかとい訊かれた。大夫は丁寧にお辭儀をした。

「申譯がございません。引續きかれこれ詮議は致して居りますが、まだ係の者が判り兼ねますの

で、埃はそのまま差し置いてございますやうな次第で……」  
とうとう、皇后の宮はある朝御自分で刷毛をもつてその埃を拂ひ落された。埃はすぐに見えなくなつた。

### 器用な言葉の洒落

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃古今傳授を受けたつた一人の男は彼だつたといふので、歌の方の造詣もほほ察しることができよう。茶も上手で、とりわけ料理がうまかつた。この方では相當うぬほれを持つてゐた利休なごも、幽齋の前には一寸頭があらなかつたらしく、ある時なごはわざわざ頼んで、鶴の料理のお手前を拜見に往つたことがあつた。

幽齋が頼才があつて、歌の詠み口なごが洒落てゐて、おまけに早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連れ立つて烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顔を揃へてゐるのを見て、



「細川二つちよつと出けり」

といつて、ちよつかいを出された。すると、幽齋は即座に、

「御所車通りしあに時雨して、」  
とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇をひいて歸らうとするに、烏丸殿はわざわざ玄關まで見送つて出られたが、こつそり家來の一人に耳打ちをして、だしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突き倒させた。(おそろしく近代的なお公家さまで、歌よみを優遇するよりも、苛めることを知つてゐる。)そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まごまごしてゐる間に、

「細川殿、たつた今一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。すると、幽齋は腰を擦り擦り起きあがりさま、

「こんと突くころりと轉ぶ幽齋が、いつの間よりか歌をよむべき」

とつたので、悪戯なお公家さんも手を拍つて嘆賞するよりほかに仕方がなかつた。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、きうぞ歌一首のうち「ひ」の字を十入れて作つ

てみてほしいと、難題をいひ出した。幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやうなことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

「日の本の肥後の火川の火打石日日にひふた拾ふ人人」

と、詠んでみせた。大名はこりずにまたまた難題を出して、今度は歌一首のなかに「木」を十本詠み込んでみせてほしいといひ出した。箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の難作もなく、

「かならずと契りし君が來まさぬに強て待つ夜の過ぎ行くは憂し」

と、有り合はせの楯と椽と桐と櫛と柿と椎と松と杉と柚と桑とを詠み込んで見せたものだ。すると、大名はぜんまい仕掛の玩具でも見せられたやうに首を捻つて感心してしまつたといふことだ。

歌の話が出たから、これは幽齋ではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑がある時のお公家さまを訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃わらい發明をした、それは歌のぎんな上の句にでもくつつけることの出来る下の句だと、出来ることなら農商務省に願ひ出で、専賣特許でも取つておきたいやうなことをいひ出した。宗鑑がぎんな句だ



「訊くと、公家は自慢さうに、」

「といふ歌はむかしなりけり。」

「といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺をよせて笑つた。

「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

「といつて」それにつけても金の欲しさよ」「といふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自分の知つてゐる古今集や百人一首のいろんな歌にくつつけてみた。ところが妙なことに、この下の句はきの歌にもよくついて、少しの縫目がみわなかつた。

「……それにつけても金の欲しさよ。」

實際よくつくと思はれたのに不思議はなかつた。そのお公家さんは、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。

今一つそんな話をつけ足させてもらはう。——こないだの歐洲戦役の當時、ある英國の軍醫が、アメリカの野戦病院を見舞つたものだ。すると、泣き面や、髯つ面やの病人たちのなかに、た

つた一人、機嫌よささうにここに顔で病床に横たはつてゐる一人の年若な傷病兵が眼についた。傷はかなり重いらしかつた。

「何か御用はごいかな、あつたら何でも伺ふよ。」

軍醫は患者の顔を覗き込むやうに言った。

「有り難う。是非伺ひたいことがあるんですが、……」傷病兵は相變らずにここにしながら言つた。「あなたならきつと教へて下さるでせうよ。」

「伺はうぢやないか。言つて御覽。」

軍醫は短い口髯を引つ張つた。それを横目に見ながら、病人は口早に次のやうにまくし立てた。

“Well, doctor, when one doctor doctors another doctor, does the doctor doing the doctoring doctor the other doctor like the doctor wants to be doctored, or does the doctor doing the doctoring doctor the other doctor like the doctor doing the doctoring wants to doctor him?”



## 當世批評家氣質

東京のある雑誌に美術記者を勤めてゐて、かなり評判のいい男がある。去年の秋の文部省展覧會に京都派の大家T氏の「河口」をいふ作品を見た時、この美術批評家は一寸その繪の前で立っぢまつたが、

「かなり器用に描けてゐるな、だが、器用だけでは仕方がない。」  
と、獨語を言ひながら、さつさと通り過ぎて往つた。

その後、この「河口」の評判が、世間にやかましく言ひ囃されるやうになると、件の批評家は急にうろたへ出した。

「こんな筈ぢやなかつた、するど俺が何處かに見落しをしたのぢやあるまいかな。」

美術批評家は慌ててまた文展の門口を潜つた。そして「河口」の前に立つて目を光らせた。すると、不思議な事には、以前見た折には、器用でばかり出来てゐると思はれた繪が、今度はすつかり興味で出来てゐるらしく思はれ出した。

「旨い、ほんまに旨いものだ。」批評家は女に接吻する折のやうに、すれすれに近寄つてみたり、馬の價ぶみをする折のやうに少し離れてみたりした。第一小松がよく描けてゐるし、それに波の調子が何とも言へない。」

批評家はそれからといふもの、毎日のやうに「河口」の前に立つた。見れば見る程いいのは此の繪の出来だつた。

「うまい、いつ見てもうまい。呉春だつて逆も敵ひつこはない。」

批評家は町で友達に出會つても、家で妻の顔を見ても、すぐこの繪の話をした。もしか自分の裏口に兎が飼つてあつたら、批評家は厭いふ程その耳を引張つて、この畫の噂を吹き込んだに相違なかつた。

批評家はこんなにまでして「河口」の評判を立てたが、たつた一つぢかに作者に出會つて、この話をしないのが残念で、堪らなかつた。で、思ひ立つて京都にやつて来てT氏に會つてみる事にした。

T氏は都合よく家にゐた。美術批評家はこの作者の前に坐つて、魚のやうに口さきを尖らせ



て「河口」を賞めそやした。T氏はいくらか擦つたさうな顔つきをして、夫を聴いてゐたが、批評家のお喋舌がすむと、静かに口を開いた。

「お賞めにあづかつて有難いが、實は自分では那の作をそんなにいいものとは思つてゐません。例の小松ですな、あの小松をもう五分ばかり左の方に寄せると、全體の感じがすつかり違つて来て、もつとよくなるかも知れませんが……」

「へね、小松を五分ばかり左へ……」批評家はそんな事になると、自分の立場がすつかりなくなつてしまふのに氣がついて、やけになつて反對した。そしてさうしても小松を動かさなければならぬなら、右の方へ一寸ばかり動かしほしいと言ひ出した。

「批評の獨立だ。批評家は腹の中でかういひながら、別をつけた。」

## 大名の駄洒落

ついになひだのこと、侯爵H氏のところへ、若い畫家五六人が饗ばれて往つたことがあつた。H氏は九州で、こゝれた五十四萬石の城主である。

ひとしきり酒がまはると、侯爵は、トマトのやうな眞赤な額をてらてらせながら、上機嫌で皆の顔を見くらべた。

「さあ、これから大いに談じよう、誰か面白い世間話をして聞かせて呉れんかな。」

「ぢや、皮切りに私がお話しませう。」

かういつて、髪の毛が長く額に垂れかかつたのをうるささうにかき上げながら、顔をもち上げたのは、仲間で一番年若で、おまけに沈黙家で評判の高いOといふ畫家だつた。

「O君、君がお話をするなんて、すゝぶん珍しいな。何の話だい。」

皆はからかひ半分にO氏の顔を見た。

「龜の話さ。」

O氏はむつとしたりやうに言つた。

「龜の話はいいね。」

皆は顔を見合せて笑つた。

「麻布のある家にお婆さんがゐましてね、それが龜を一匹飼つてゐました。……」O氏はしん



みりした調子で話の緒を切つた。それによると、婆さんは二十年近くの間自分の娘同様に龜をいたはつて大事にかけてゐた。龜の方でもまたすつかり婆さんに昵懇んで、婆さんが池の縁へ出て来てその名前を呼ぶと、龜は親切な自分の飼主の御機嫌を伺ふやうに、ひよつくり水の上へ浮き上つて、ちつと婆さんの顔色を見入つたものだ。ところが、この頃になつて、婆さんは家の都合で牛込邊へ移轉をしなければならなくなつた。悲しいことには、移轉先には龜を飼ふやうなお池がないのである。

「池がないのでね……」O氏はまるで自分の家にお池がないのでもあるかのやうにほつと溜息をついた。

「池がなかつたら、鹽でも足りるぢやないか。」

誰かが横つちよから口を出した。するとO氏はむつとして、

「婆さんは鹽なんかで龜を飼はうとは思つてゐない。婆さんは龜の自由を尊重してゐるんだ。」と、きめつけるやうに言つた。居合せた若い畫家達は、これまで婦人に對するのと同じやうに、龜の自由を尊重してゐなかつたので、急に龜のやうに首をすくめたが、五十四萬石の太守日侯

ばかりは泰然としてゐた。O氏はまた話し出した。

で、婆さんは誰かほんごに龜を可愛がつて呉れる者で、家になりな池を持つてゐる者があつたら、龜を譲りたいものだ。三方聞合せてゐるが、今時そんな人は見つかりやうがないので、移轉を目的先に控へてゐる昨日今日、龜のどこかまけて何にも手がつかないでゐるといふのだ。

「こりや面白い、面白い話だね。」

皆は口を揃へて言つた。暫らくするとそのなかの一人はO氏の顔を見ながら言つた。

「O君、君は今婆さんが名前を呼ぶと、龜がひよつくり顔を出すと言つたな。」

「うむ、言つたよ。」

「二たいやう言つてその龜を呼ぶのかね。」

「さあ、どう言つて呼ぶのか……」

O氏は髪の高い頭を引つ抱へてゐたが、苦笑ひしながら言つた。「その邊は僕もよくきかなかつたがね。」

「そんなことは聞かなくともよくわかつてゐるぢやないか。」



といふ聲がした。一語一語慶長小判を落すやうな牙わたた聲であつた。それは誰でもない、五十萬石の城主H侯だつた。

「ぢや、何といつて呼ぶのでございますね。」

「それはかうさ……」H侯は聲に一寸調子をつけながらいつた。

「それはかうさ——」

もしもし龜よ

龜さんよ……」

時

計

小説家のS氏は文學者に似合はない立派な時計をもつてゐる。英國のベネット製の懐中時計で、側はニッケル製だが、機械のいい、時間の正しい事にかけては一寸類のない、S氏自身の言葉によると、日本にたつた四つしか無いといふ大切な代物である。

この時計がS氏に不都合だといつて、腹を立ててはいけない、不都合だといふのは値段が高

いからいふのではなく、時間がそんなに正しいのをいふのである。S氏が汽車の車掌か、測候所の技師であるならば兎も角も、小説家であつてみると、ちよいちよい時間の遅れる時計を持つてゐた方が、萬事につけて都合がよささうなものだ。

そのS氏があるとき友達と一緒に電車に乗つた事があつた。車が日比谷まで來ると、車掌は乗換切符に剪刀を入れようとして、自分の腕時計を見た。すると安物の腕時計はいつのまにか両手をひろげてしまつてゐた。

「これはいかん、時計が止まつてゐる。車掌は叱きながら車中のお客を見まはした。『ごなたか時間を教へていただけでせうか。』

「時間か」S氏は帯の間から自慢の懐中時計を引張り出した。S氏の考へでは、成るべくなら日本にある時計といふ時計を、自分の有つてゐるネット製の上等時計に合はせておきたかつたのだから、それにはこんな恰好な機會はなかつた。『ちやうど十二時に五分前だよ。』

「有難うございます。車掌は禮を言ひ言ひ針を直さうとするに、S氏と同じやうにポケットから時計を取り出して時間を見てゐた批評家の友人は横つちよから口を出した。



「をかしいな、僕のは十二時に五分過ぎだぜ。」

「へね、十二時に五分過ぎ。車掌はさつちに従つたものかと一寸途方に迷つたらしかつたが、ひよいとS氏のニッケル側と友人の金側とが目に入る、初めて判断がついたやうに金側時計の持主の方に向なほつた。」あなた、十二時に五分過ぎと仰有いましたね。有り難うございました。車掌は安心して腕時計の針を十二時五分過ぎに直した。

「あれだから困る、世間のわからずやといふ者は。機械を見ないで、ぢきに外側だけで、善い悪いを判断するものだから。」

S氏は獨り語を言ひながらにやりと笑つた。

S氏に告げる。世間はまあそんなもので、もしか世間の人達が、S氏の時計が、日本に四つしかない事を知つて、皆が皆立停つて時間を聞いたら、S氏もつくづく好い時計を持つた事を後悔するだらうから。

### 宰相と馬鹿者

自分達の二番目の戀人が誰だつたかを思ひ出せない人達も、ナポレオンの二番目の皇后が奥地利帝の皇女マリア・ルイザであつたのは知つてゐる筈だ。何故といつて、この世の中には、帝王の事だつたら、どんな些細な事でも、きつと記録に書き残す歴史家といふ筆まめな輩が住んでゐるから。

ナポレオンがその皇女ルイザと結婚して間もなく、奥地利政府の當局者が、何か政策上の事で、この英雄の意見とひどく異つた處置を取つた事があつた。その報せがナポレオンの耳に入る、この色の白い洒落者の小男は櫻んほのやうに眞紅になつて怒つた。そして

「奥地利皇帝は老いほれの馬鹿者だな。」  
と口汚なく罵つたものだ。

ナポレオンの聲はかなり大きかつたが、奥地利までは聞えなかつた。だが、卓子の向う側には皇女ルイザが腰かけて何か讀んでゐた。ルイザは顔をあげて良人の方をふり向いた。

「あ、吃驚した、何を仰有つたの。阿父様がガナツシユですつて？ガナツシユつてどんな事なの、ねね、貴方……」



ルイザは生れて初めての此の佛蘭西語の意味を訊きただした。  
ナポレオンははたゞ當惑した。

「ガナツシユかい。さあ、何と譯したもんだらうね、まあ一口にいふと、經驗にも富んで考へ  
の深い人の事をいふんだ。」

胡麻化し上手のこの英雄は、をかしさを噛み殺しながら、こんな事を言つた。

「さう、ガナツシユつてそんな事なんですの、いい言葉ですわね。」

皇后は幾度か口のなかで其の言葉を繰返したらしかつた。

その翌る朝、宰相が皇后に謁見した事があつた。すると、皇后は小鳥のやうな可愛らしい口  
元をして、

「宰相は吾が國で一番わらい馬鹿者ですわね。」

と挨拶をしたものだ。宰相は絞め殺されでもするやうに、眼を白黒させてみたが、暫くしてから  
「は、恐れ入ります。」

と心から恐縮して下つて往つた。

ナポレオンは後でこの話を聞いて、腹をかかへて笑つた。宰相も機嫌を直して笑つたが、ル  
イザめ、事によつたら、何もかも辨へてゐて、こんな戯をしたのかも知れなかつた。

### 男と女との胸の鈕の相異

今日は一ついつもと變つて、小話を書き集めてみることにする。——西洋の習慣で男の外套  
は左から右へ合はせるのに、女のはそれと反對に右から左へ合はせることになつてゐるが、その理  
由を知つてゐる人はたんと有るまい。博識家めいた言ひ振りだが、吾々の祖先は今の婦人と同  
じやうな着方をしたもので、いつも獸の皮にばかりくるまつてゐた彼等は、毛皮の襟を合はせ  
るのに左手で右前を引張るから自然右手で針留めを刺さなければならなかつた。猶太の坊さん  
はいまだにこの古式の習慣を傳へて、婦人と同じやうに右から左へ襟を合はせてゐる。人間の  
歴史がだんだん狩獵時代より進んで、種族と種族との競争が激しくなり、戦人が必要になるに  
つれて、左脇にさした劍を抜くのに、これまで通りの着方では、外套の襟が邪魔になるので、男子  
はすべて今のやうに左から右に合はせることになつたのである。そんな心配のない婦人は、今にむ



かしの型をそのままに右から左へ襟を合はせてゐる。婦人が人争ふのに、劍の代りに舌を使つたのはすばらしい發明であるが、その故で彼等は襟釦のどめきころを變へる必要がなくなつた。

「この家でも、主人が家庭にばかり閉ぢ籠んでゐると、女房の多くはすべてそれを物足りなく思つて、さうかして亭主を粗殺か何ぞのやうに門口から外に掃き出す工夫はないものか、ついそんな事までも考へ出すものだ。著述家や學者のやうにいつも書齋にばかり引込んでゐる輩が女房に好かれぬのは、大抵かうした理由によるものである。發明家のエヂソンも結婚後いつも家にはかり閉ぢ籠つてゐたので、花嫁の機嫌を悪くしたことがあつた。花嫁はエヂソンの友達を訪ねて何かの會があつたら主人を誘ひ出してほしいものだ。友達も承知した。エヂソンはその翌る晩ある會に誘ひ出されたが、騒々しい人なかを好かない性なので、客間に入ると、すぐに片隅に置いてあつた椅子にもたれて、何か考へ事をしてゐるらしかつた。陽氣な友達は發明家のことなどはつい忘れてしまつて、若い女を相手に世間話に夢中になつてゐた。時が経つてやつと忘れものに氣がついた友達は、慌て、四邊を見まはした。するにエヂソンは

先刻と同じやうに室の片隅にある椅子にもたれたままでちつと頭を抱へてゐた。友達は歩みよつた。そして頭痛でもするのかと訊いた。發明家は溜息をつきながら、退屈さうにいつた。「せめて犬でも一匹ゐてくれるといいんだが」……

愛蘭の詩人イエツは氣分ほゞ大切なものはない、歴史上の大事件でも煎じつめること、ふとした人間の氣分一つに原づいてゐるのを見付けることが少くないといつてゐるが、實際さうで、むかし韃靼人と波斯人とが幾年もにわたつて大戦争をした事があつた。その原因をよく訊いてみると、韃靼人が波斯人は口髭をよく手入れしないから薄汚いといつたからのことで、波斯人に髭でもなかつたら、あんな恐ろしい戦争は起らなかつた筈である。夫婦喧嘩なども全くとくさうで、オスカア・ワイルドだつたかの言葉にこんなのがあつた。——朝飯さへうまく食べさしてくれたら、まあ大抵のことは辛抱してもいいと。

### 自分の葬式に自分の歌で



英國の詩人ジョン・キーツは、死ぬる間に友達に向つて、自分の墓には「ゆく水に名を書きし人ここに眠る」とだけ書いてほしいと遺言した。こないだ亡くなった鷗外森林太郎氏は、墓には何にも記さないで、唯「森林太郎墓」とだけ書いてくれ、忘れても墓の字の上に「之」を書き入れるのぢやない、文字は中村不折氏に書いてもらつてくれと言ひ遺したさうだが、音楽家が楽器を氣にするやうに、文字の遣ひ方にひきく神経質だつた人だけに、死ぬる間際にも「之」の字一つが氣になつてならなかつたものらしい。中村不折氏に墓碑の文字を頼んだのはさういふものか。この頃アメリカの新聞で見ると、紐育に住んでゐるある男は、自分が大病にかかつて、もうとても助からないと氣が付くと、寢床に横たはりながら大きな聲でお葬式の讚美歌をうたつたものだ。そしてそれをレコードに取つて、自分の葬式には何にも要らないから、ただこのレコードだけをかけて、その讚美歌のなかに儀式を済ませてくれと遺言して亡くなつた。葬式は遺言通りに自分のうたふ讚美歌で自分の屍骸を葬るとになつたさうだが、鷗外氏もいつそのこと、自分で自分の墓碑を書き残しておけばよかつたのに。

名高い京都の陶工青木木米は、自分の職業柄日本はいふに及ばず、支那南蠻の物まで、良土

といはれる土は大抵集めてゐたさうだが、いつも戯談まじりに、

「わしが亡くなつたら、さうかあの倉のなかにある方方の土を加茂川の水で捏ねて、その中へわしの死骸を入れて、一つ土團子をこしらへてくれ、そしてそれを三日三夜粟田の竈で焼いた上、京の北山の中に埋て貰へば、外に何にも思ひ残すことはないわさ。」

と、言ひ言ひしたもので、それを聞く人もそれは面白からうといつて笑つたものさうだが、さてほんたうに亡くなつてみれば、陶工とは言ひ條、まさか死骸を土と一緒に捏ねるわけにゆかないで、葬式は世間並にしてすませたさうだ。

### 滑稽作家の諧謔

滑稽作家マアク・トエンが、いつだつたか英國通ひの汽船に乗り込んで、その喫煙室ですばすばやつてゐたことがあつた。室一杯に溢れた白い煙の中には、いろんな顔が見えて、しきりと何か話し合つてゐるらしかつた。作家は聞くともなしに耳を傾けると、皆は萬一この船が航路の途中で火事でも起すやうなことがあつたら、さうして助かつたものだらうといふことをし



きりと話し合つてゐるのだつた。それを聞くと、この滑稽作家が持前の悪戯つ氣はむくむくと頭をもちあげかかつた。作家は一膝のり出した。

「皆さん、承はるゝ火事のお話らしいが、火事といへば、私にはすつと以前の手柄談がつい昨日でもあつたことのやうに思ひ出されます。それは丁度私が泊つてゐたあるホテルの火事でしてね……」

マアク・トエン氏は以前のことを思ひ出すやうな目つきをして、ちよつと葉巻に口をあてた。皆は黙つてこの話上手の顔を見た。

「何分夜のことでしたから火足はかなり速く、皆が火事だゝ氣が付いた頃には、ホテルはもう一面火に包まれてゐました。見るゝ、第四階の露臺に老人が一人煙に包まれて立つてゐるぢやありませんか。ああ老人がゐる。四階目の露臺に老人が一人残つてゐる。さうかして助けてやらなくつちやと、口口に我鳴りたてるが、誰一人さうしていいかは解らないのです。梯子もいつたところ、さても達きやうがないし、皆はあれあれといふばかりで、じつゝ火の行方を見つめてゐました……」

「恐ろしいことだ、人の焼け死ぬるのを目の前に見るなんて……」頭の頰けに銀行家らしい男は、唸るやうに言つた。

「全く恐ろしいことでした……」滑稽作家はその男の頭を見ながら、お愛相のやうに一つ頷いてみせた。「ところが、その刹那に私の頭にある考へが雷光のやうにひらめきました。

繩をくれ、繩を……

私はかう叫びました。誰だか長い繩を持つて来てくれたので、私はその端つほを握りながら、非常な力でもつて繩の片端を老人に投げつけました。老人はうまくその繩にこりつきました。その繩でお前さんの腰を縛るんだ。

かう私が下から怒鳴ると、老人は救へられた通りに腰を縛りました。それを見まして私は力一杯に老人を四階の露臺から下に引きずり落しました。お陰で老人は助かりました。」

皆は感心したやうに溜息をついた。なかには何かひそひそ小聲で囁くものもあつたが、滑稽作家はこの様子を見て、可笑しさにたまらぬやうに、つゝ起ち上つて、煙の中から次の室に逃げ出して行つた。



## 小話數則

歐洲大戰役當時米國の應募兵のなかに、腦の後頭部が削いで取つたやうに凹んだ頭をした兵卒の一人があつた。軍醫は物珍らしさうに指さきでそこを弄り廻して、いろんな事を訊いてゐたが、それだけでは何うも腑に落ちないので、最後にこんな事を言つて訊いた。

「お前結婚してゐるのかい、女に溺れ過ぎるも、偶に頭がこんな恰好になるのがあるが。」

「いね、結婚などしてやしません。兵卒はきつぱり答へた。「旦那、そこは驢馬に蹴られた痕なんぞ。」

驢馬と女——うまい事を言つたもので、軍人にしては少し出来すぎた返辭である。

今度の休戦が昨年十一月十一日の十一時に成立つたといふので、ある御幣擔ぎは、この十一といふ數を何か特別のもののやうに縁起を擔ぎ出した。で、早速舊約全書の第十一卷目にある「列王記略」上卷の十一章の十一字目を披いてみた、すると聖書には「怒うあつた。」

「此の事爾にありしに因る、また汝わが契約をわが爾に命じたる法憲を守らざりしによりて、我必ず爾より國を裂きはなして、これを爾の臣僕に與ふべし」

してみると、獨逸が共和國になるのは極つた事實なので、ちやんと聖書に豫言してあつたのだと言つてゐる。

歐羅巴の戦線に派遣せられた米國の軍隊に、牛乳配達夫の召集せられたのが一人交つてゐた。

その男が最近郷里の女房あてに寄した手紙には、次のやうな文句があつた。

「僕は軍隊生活は好きになつた。實際大抵の事は辛抱するが、たつた一つ朝五時半までも寢床のなかに入つてゐなければならぬのだけはうんざりする。」

政府は近々小包郵便の料金を更へるさうだが、一八四五年米國政府が、普通郵便物の料金を三百哩までは五仙、それ以上は十仙に規則を變へた事があつた。すると郵税収入がうんと減つて來たので、其の筋では今更のやうに驚いた事實があつた。人間といふ奴は、郵税が高くなると、



直ぐ御無沙汰をする事を知つてゐる。

亞米利加の西部にある、或る日曜學校で教師がしかつべらしく訊いた事があつた。

「嘘はぎんな事です、皆さん知つてゐますか。」

一人のこましやくれた女の子が直ぐ起ち上つた。

「神様にはお叱を受るかも知れませんが、人間が困つた時には觀面に効力がある事なんです。」

子 供

故人ルウズヴェルトの澤山ある子供の一人が——誰だつたか名前は一寸思ひ出せないが——幼い頃公園の木かけで下様の身なりの汚い子供達と一緒に遊んでゐた事があつた。

すると、そこを孔雀のやうにめかし込んで一人の婦人が通りかかつた。婦人はちらと子供の顔を見ると、そこへ立ちぎまつた。

「ちよいと、あなたルウズヴェルトさんの坊ちゃんやなくなつて。」

子供は圓まつちい顔をあげた。

「さうだよ、何か用なの、小母ちゃん。」

「坊ちゃん。孔雀のやうな婦人は、指をあげてたしなめるやうな眞似をした。『あなたはルウズヴェルトさんの坊ちゃんぢやありませんか。そんな下様の子供達と一緒に遊ぶものぢやありません。阿父様に叱られますよ。』」

「叱られるもんかい。子供は猿のやうに白い齒を露いて見せた。阿父さまは平常言つてらつしやらあ。子供には背の高いの低いの、お相巧なの意地悪なのあるばかりだつて。下様の子供だなんて、そんなのがあるもんかい。」

おめかしやの婦人は弾機ではじき飛ばされたやうな、顔をしてさつさと其處を立ち去つたさうだ。

黒い運轉手

チャアアルズ・シエワップ氏は今では閑地で遊んでゐるらしいが、戦時中はアメリカ切つて



の働き手として、その凄腕つぷりをみせたものだ。そのシユワツプ氏が、ある時自分の古い別荘をどりのけて、その跡へ新しいのを建てかへようとしたことがあつた。シユワツプ氏は、これまでの古い家を、今はもうそれに要がないからといつて、ばらばらに毀すことを好まなかつた。出来ることならそのままそつくり屋敷のまゝかへ持つてゆきたいらしかつた。それにいつて難澁なのは、家の周囲にたくさん立木があることで、それを傷めなければ家を動かすわけにゆかないらしかつた。で、そんなことに経験のある請負師が呼ばれて、相談にあつた。請負師は困つたやうにいく度か立木のなかを見あるいてゐたが、やがてシユワツプ氏の前へ出て来たをりには、晴々しい顔つきをしてゐた。

「旦那雑作もないこつてす。たつた三本だけ庭木をないものと思つていただきませう。」

「なに、庭木を三本だけないものと思へつて。」シユワツプ氏は苦い顔をした。「つまりビステキが食べたさに、うちの飼牛を殺せといふんだな、わしにそんな真似が出来ると思ふのか。」

請負師はビステキのやうに顔からあぶら汗を流した。そして主人公のいふがままに、高い足場を組み立てて、古い家をうんと持ち上げて、庭木の枝一本折らないで、やつとこゝまで頭越しに

屋敷のほかの場所へ持ち運ぶことにしたさうだ。庭木をいたはる心がけは殊勝なことだが、大きな別荘をそのままそつくり持ち上げて、庭木の上を持つて運ぶなぞ、アメリカ人でないといふ思ひつきさうもないことである。

そのシユワツプ氏が、ある時黒ん坊の運轉手と肩を並べて、同じ運轉手臺に腰を下して、紐育の街を走らせてゐたことがあつた。すると、街を通り合せた二人の紳士があつたが、その一人が自動車を指さして、

「あれ、あの車に名高いシユワツプさんが乗つてゐる。」

といつたものだ。すると、今一人の紳士は

「なに、シユワツプさんぢやちらがね。」

と胡散さうにいつて、駈けてゆく自動車の運轉手臺を見たさうだ。それをちらと小耳に挟んだシユワツプ氏は、長い一生を通じてその瞬間ほど、きやつつけられたやうな思ひをしたことはないといつたさうだ。運轉手臺には黒ん坊と氏とたつた二人しかゐなかつたのである。



## 牧師の悪妻

親鸞聖人の室玉日姫のむかしは別だが、今の世には僧侶や牧師の女房にろくな女は見つからないやうだ。アメリカのメソヂスト派の牧師にバックレエ博士といふ爺さんがある。この爺さんがある時南合衆國の方へお説教にいつてそこにある亞米利加印度人のある教會で信仰談話會に列したことがあつた。

すると、一人の色の黒い女が眞先に立つてお話を初めた。女は厚い唇から唾を飛ばしながら、宗教は私のやうな見るかきもないものに逆光を興へて下すつた、慰めを興へて下すつた、安心を興へて下すつた、そして又家庭に平和を興へて下すつたといひ出した。そのまま黙つて聞いてゐたら、女は郵便切手や銀行の小切手のやうなくだらぬものまで神様にねたり兼ねないやうに思はれたので、博士は兩手で押へつけるやうにして、横から口を出した。

「奥さん、それは御結構なことですが、實際方面では如何ですな。あなたの宗教は御主人への御飯仕度に多少とも効能がございましてかしら、御主人はあなたが宗教をお信じになつてから

すつとお幸福でいらつしやいますかしら。それから……」

バックレエ博士がなほも言葉をつがうとすると、だしぬけに誰とも知らず横から腰のあたりをつくものがあるので、博士は後を振向いて見た。するとそこには色の黒い土地の牧師が遠慮さうに首をすくめて縮こまつてゐた。

「先生、どうぞ御質問はそのくらゐにして頂きたいものですな。實はあの女は手前の女房でございまして……」

さすがの博士もそれを聞くに、苦笑ひするより外に仕方がなかつた。なぜといつて、その牧師は女房のこしらへてくれる御飯だつたら、どんなものにも舌鼓を打ちさうな顔をしてゐたから。

## 禪僧と靴

つい先日亡くなつた、丹波國何鹿郡東八田村安國寺の住職梅垣謙道和尚は、今一休といはれただけに、いろんな逸話に富んだ男であつた。



或る夏和尙は叡山の僧坊を借りて、夏季修養會を開いた事があつた。豫て和尙の人柄を聞いて居た學生達は、物好き半分に、二三十人許り集つて來た。

和尙は、それを一堂に集めて、しかつべらしい顔をして言つた。夏分の修養は、何よりも涼しく、おまげに手輕でなくてはならない、それには各自に放屁するに限る、と。

學生達は、呆氣に取られた。放屁して修養になる事なら、わざわざ叡山のてつ邊まで來るに及ぶまいといふので、到頭折角の修養會も丸潰れになつてしまつた。

何時だつたか、京都の市會議事堂で、慈善音樂會が開かれた事があつた。和尙托鉢の道すがら、その前を通りかかつた和尙は、肝腎の托鉢もそつちのけにして、音樂會の門口に立つた、實を云ふと、和尙は此れ迄一度だつて音樂會と云ふものを聞いた事がなかつたので、前を通り合はせたのを縁に、一寸覗いてみたくなつたのだ。

和尙はづかづか玄關に入つて來た。托鉢の途中なので、胸には南禪僧堂の頭陀袋をかけて、足には草鞋を穿いて居た。

受付には、頭を綺麗にわけた若い男と、孔雀のやうに着飾つた若い女とが立つて居た若い男は

今和尙の入つて來るのを見ると、片手で和尙の胸を押へるやうにして、片手で玄關に貼つてあつた紙片を指さした、紙片には「靴の外昇降を禁ず」と書いてあつた。

和尙はじつとそれを讀んでゐたが、

「靴といふのは、一體みんなもんぢやな。」

とだしぬけに訊いた。若い男は、和尙の間が餘りむづかし過ぎるので、一寸面喰つたらしかつたが、仕合せとその日は自分が新調の靴を穿いて居たので、得意さうにそれを片足前へ踏み出して見せた。

「見ておきなさい、靴はこんなもんですよ。」

「ほほう、變なもんぢやな。和尙は不思議さうに若い男の足を覗き込んだ。」村へ土産にしたいから、此れを片足貰へまいかな。」

「滅相な。若い男は周章で片足を引込めた。

「ははあ、惜しいと見わるの」

和尙は大きな聲で笑ひ出した。



「一體その靴といふものは、何でこしらへてあるのぢやな。」  
 「靴ですか、靴は……」若い男は無作法な坊主をこらしめるには、何でも強い事を云ふに限る。でも思つたらしかつた。「靴は牛の皮のもあれば、象の皮のもあります、それから虎の皮のだつてありますあ。」

「ほほうして見るにみんな獸の皮ぢやな、乃公のは草鞋と云つて米の皮ぢやぞ」と云つたと思ふに、和尚その儘泥のへばりついた草鞋の儘、すつと女關を駆け上つて中へ入つてしまつた。

## 寄 附 金

亡くなつた丹波國何鹿郡安國寺の住持梅垣謙道師が、いろんな奇行に富んだ坊さんだつた事は前に書いた。

いつだつたか、謙道師は大本教の教祖出口お直婆さんの評判が餘り喧しいので、つい會つてみたくなつたので、わざわざ安國寺を出て綾部の大本教本部まで訪ねて行つた事があつた。その折お直婆さんは、風邪か何かで臥つてゐた。取次の者がその由を言つて断ると、

「なに、病氣か、病氣なら仕方がない、病室へ行つて會はう。」

謙道師はかう言ひながら、もう草鞋を脱いで玄關に上つて行つた。取次は病室に案内するより外に仕方がなかつた。

臥つてゐたお直婆さんは、室に入つて來た坊主の姿を見るなり、慌てて起き上らうとした。謙道師はそれを手で押へるやうにした。

「そのままに。そのままにゐて下さい。」謙道師はきかりとお直婆さんの枕元に坐つた。そして檀家の皺くちや婆さんに説教をするやうな口調で言つた。「起き上ると、兎角安心が頭を擽ち上げるでな。病人は寝てゐるに限る。淨土の法然坊も言つた。淨土の行人は病患を得て之れを樂むと言つてな。」

お直婆さんは赤ん坊のやうに口をもぐもぐさせた。法然が何と言はうが、病氣は一日も早く癒つた方がいらしかつた。

暫時すると謙道師は急に居すまひを直した。そして今度自分の寺で、本堂を修繕したいから、應分の寄附を頼みたいと言ひ出した。



「お宗旨が違ひまへんか。」お直婆さんは小鳥のやうに口を尖らした。  
 「宗旨は違つても構ひません。相身互ぢや。乃公の方では、本堂さへ修繕出来れば、それでいいのぢやからな。」

謙道師は氣もない顔をしてこんな事を言つた。お直婆さんはこんな坊さんに見込まれては、黙つて金を渡すより外に仕方がなかつた。婆さんは執事呼んで金を五十圓寄附した。

頭の圓い坊さんは、その五十圓を黙つて懐に捻込んだ。

「いや、ありがたう。御寄進は確に戴きました。それについて今一つお頼みがあるのぢやが……」  
 謙道師はにやにや笑ひ出した。

「頼みつて何ぢす。私、今日は頭が病んで……」

婆さんは態こらしく頭に手をやつて顔を擧めた。出来ることなら、こんな不作法な客に一刻も早く歸つて貰ひたかつたらしかつたが、そんなことに遠慮する謙道師ではなかつた。

「お頼みといふのは外でもない。あんたも以前は大工のおかみさんぢやつたが、兎も角も乃公の寺に、大枚五十兩の寄進が出来るやうになりなすつた。結構な事ぢや……」

謙道師はかう言つて懐の上から捻込んだ五十兩を叩いて見せた。

「こんな結構になつたお祝として、別に三十圓寄進に附かつしやい。」

「別口にまた三十圓ぢすか……」お直婆さんは、何の爲めに關係のない安國寺に、二口までも寄進をしなければならぬのか、理由が解らないらしく、口の中でぶつぶつ呟いて居たが、それでも執事呼んで、その三十圓をも出させた。

「奇特な事ぢや、病氣は確に癒りますよ。」

謙道師は醫者でも言ひさうな事を言つて、その三十圓をも懐に入れて座を立つた。

### 素的に短い大演説

亞米利加の前大統領ウキルソン氏は名だたる雄辯家だが、いつだつたか演説について話をして

「一時間位の長さの演説だつたら、即座に出来る。二十分程のものだつたら、二時間の準備が要る、若しか五分間演説だつたら、一日一晚の支度がなくつちや。」と言つたことがあつた。實



際演説といふものは、短ければ短い程骨が折れるものだ。

その短い演説を誰よりも巧にやりおぼせたといつて、ある時それを自分の女房に自慢した男があつた。それは Joseph Choate といふ亞米利加の法律家出の外交官であつた。

「短い演説は難かしいものだ、むかしから言ひ傳へてきたものだが、俺はずつと以前ほんに短い演説で、すばらしく立派なのをやつたことがあつた。演説はたしかに大受だつたよ。」といつて、この外交官は眼鏡越しに夫人の顔を見た。夫人はせつせと編物をしながら、おつきあひらしく返事をした。

「どう、それは結構だつたのね。そして聴衆は幾人位あつたの。」

「聴衆かい。」外交官は胡散さうに願の圍りを撫で廻した。「聴衆はたつた一人だつたよ。」

「わ、たつた一人……」夫人は編物の手を止めて夫の顔を見た。「そしてその一人はどんな方だつたの。」

「若い、美しい女だつたよ。」

外交官はわざと落着き拂つて言つた。

「まあ、若い女の方で、その方に、あなたさんなお話しをなすつたの。」

夫人は險しい目附をして夫を見た。若しか夫の顔のどこかに綻びでもあつたら、すぐに編針でもつてつづくりでもしさうな權幕であつた。夫人の膝からは毛糸の玉が小猫のやうに轉がり出した。

「私は貴女を愛します。と言つただけだつたよ、話しは。」

「まあ、そんなことを言つたの。そしてその人は今ここにゐらつしやるの。」

「今ここにゐらつしやるよ。」外交官は節節の高い指で皺くちやな夫人の顔を撫で廻した。「演説はたしかに大受だつたね。」

「ふ、ふ、ふ……」

夫人は目を細めて、猫のやうに咽喉をごろごろさせてゐた。

### 自動車王と子供

米國の次期の大統領選挙に共和黨の一候補者として、ミシガン州のデアボーン俱樂部から推



されてゐるのは、人も知る自動車王のヘンリー・フォワード氏である。その自動車王が昨年だつたか、夏の真中に友達といくたりか一緒に、自分の持地である華盛頓州のある森へ野宿に出かけたことがあつた。森に着くと、自動車王はすぐにシャツ一枚になつた。

「これから薪の用意をしなくっちゃや。」  
かういつて、自動車王は鋸を持って木立のなかへ駆け出して行つた。すると、先刻から一行を出迎へに來てゐた、自動車王の持地の隣に住んでゐるリーといふ男の小倅も、後を追うて森の茂みに姿を隠した。

二人は一緒になつて、そこらの木を伐り倒して、それを薪に挽いた。自動車王は少し挽き疲れたので、あたりの切株に腰を下した。そして掌面にへばりついた鋸屑の儘で、額の汗を押し拭つた。

「お隣の坊ちゃん……」自動車王は傍でせつせと薪を挽いてゐるリーの倅に話しかけた。

「坊ちゃんは何つてゐるのかい。君が今一緒に薪を挽いてゐるのが、米國切つての自動車王ヘンリー・フォワードさんだつてことをさ。」

それを聞くと、隣の小倅は急に鋸をやめて、猿のやうに小さかしく顔をふり向けた。そして自分の傍に立つてゐるのは、自動車王だらうが、白樺の木だらうが、そんなことはどうでもいいと言つた風に返事をした。

「フォワードさん、そんならあなたも御存じなのですか。ここで今一緒に薪を挽いてゐるのがリーさんの息だつて……」

自動車王は鋸の腹で横面を張り飛ばされたやうに目を白黒させた。

そんな話を今一つしよう。——歐洲戦争の以前、亞米利加生れのある女が獨逸へ旅行して、ある機会に前の皇太子に會つたことがあつた。皇太子は立派な宮殿のなかを方々案内し廻つた末、ホオヘンツォルン家の御先祖の肖像がぶらりと並んだある室にはいりながら言つた。

「貴女のやうな亞米利加生れの方には、一寸合點がつき兼ねるでせう。私は自分の先祖調べをして、二十六代まで調べ上げることが出来るんですからね。」

亞米利加女は女猿のやうに白い歯をむき出した。

「それは御結構ですね。ですが、そんなこと以外に、あなた何がお出来るんですか。」



獨逸帝國の豫言

乾坤一擲の大賭博を打つた獨逸皇帝の祖父さんが、ウイルレム一世である位の事は知らぬ人もあるまい。この人がまだ普魯西王フレデリキ・ウイルレム四世の皇弟であつた一八四九年のある秋の日、御微行でライン河の河つ縁をぶらぶらしてゐた事があつた。佛蘭西の二月革命から飛火した伯林暴動に對するその態度が善くなかつたといつて、ウイルレムは方方から盛んに不評判を浴びせられてゐた頃で、自分の運命に、いつかまた芽が吹かうかなきとは夢にも思つてゐなかつたので、暗い顔をして黄ばんだ森影を歩いてゐた。

そこへひよつくり顔を出したのは、ジブシイの占ひ女で、蒼色の顔を皺くちやにして、

「陛下、御運を見させて戴きませう。」と言つてお辭儀をした。

「陛下」を聞いて、ウイルレムは少からず喜んだ。

「陛下つて、さこの國のだい。」

「申上げる迄もありませんさ、新しい日耳曼帝國のね……」

と占ひ女はにやにや笑つて返事をした。

ウイルレムは幾らか眞面目になつて來た。

「そんな帝國がいつ出来るな。」

ジブシイの女は紙片を取り出して、拙な文字でその年の一八四九年、その數をそれぞれ書き加へた。

1849 1 8 4 9  
1871

「御覽なさいまし、こんな數が出ました。してみるに一八七一年だに見えますよ。」  
實際その通りで、日耳曼帝國が出来上つたのは、一八七一年だつた。

ウイルレムは身體を乗り出すやうにして訊いた。

「ぢや、其の帝國を乃公は幾年位治めるだらうね。」

占ひの女は、紙片でまた勘定を始めた。以前と同じやうに一八七一年へ、その數字をそれぞれ書き加へながら。



1871	1	8	7	1
				—
				1888

「ちよいと、こんな数になりましたよ、これで見ると陛下の御治世は一八八八年までといふ事になりますわね。」

實際ウィルヘルム一世の崩れたのは、その一八八八年であつた。

皇帝はジブシイの女がてきばき返事をするので、幾らか調弄氣味になつて訊いた。

「そして其の帝國はいつ迄續くだらうな。」

「さやうでございますね。」

と、女はまた勘定を出した。一八八八年へ、その数字をそれぞれつけ足しながら。

1888	1	8	8	8
				—
				1913

「こんな数が出ましたよ。」

と、ジブシイの女は相手の眼の前へ1913といふ数字を突きつけた。

皇帝はその数字を見ると、ふんど鼻で笑つて行き過ぎたさうだが、一九一四年に始まつた今度の大戦争が、獨逸帝國を、みじめな破滅に持つて往つたのを思ふと、ホオヘンツォルレルン家の最後の治世は一九一三年だつたといふ事になるのである。

### 飯を安く食ふ法

米が高くなつて、世間が騒々しくなつて來た。この食糧品の暴騰から來る生活難を濟ふには、朝鮮米を行き渡らせるのもよからうし、方針を過つた役人達を農商務省の椅子から引きずり下すのもよからうが、今一つそれよりもずつと良い方法が残つてゐる。

話は古いが、徳川四代將軍の頃、阿部豊後守忠秋が老中を勤めてゐた事があつた。豊後守といへば、江戸市中に棄兒があれば、屹度拾つて養育した程の慈悲深い男だつたが、それでも時々は馴極な悪戯をして、友達を調弄ふ程の心の餘裕は持つてゐた。

ある日の事、豊後守は自分の同僚大久保忠成が大きな辨當箱を持つて來てゐるのに氣がつ

した。



「忠成め、飛んだ食ひぬげと見わたるて。」豊後守はそつと其辨當箱に觸つてみた。箱は鐵櫃ほ  
き持ち重りがした。「怖ろしい重みだな。こいつをこつそり食べて置いて、きんな顔をするか見  
てゐたら面白からうて。」

かう獨語を言ひ言ひ、四邊を見まはしながら、そつと其の辨當を盗み食ひした。やつと食べ  
てしまつた後では、腹は大名を鵜呑みにした藁のやうに膨れてゐた。暫くすると、忠成はひよ  
つくり其處へ顔を出した。恰も時分時なので、黙つてそこにあつた辨當箱を取り上げた。そし  
て蓋を開けたと思ふと、急に變な顔をしてじつと内部を見てゐたが、暫くすると氣もない顔で、  
「今朝方あまり食べ過ぎたものか、さうも食氣がなくて困る。」

と呟き呟き、そつと元々さほり蓋をして、辨當箱を側に押しやつた。

豊後守は可笑しさを噛み殺して、忠成を相手に何かと世間話をしてゐた。話してゐるうち  
に、忠成の返辭が段々氣乗りがなくなつて來るのも可笑しい事の一つだつた。暫くすると、  
忠成は「今日は屋敷に用事があるので少し早引をする」と言つて慌てて下つて往つた。豊後守  
は其の後姿を見送りながら腹を抱へて笑ひこけた。

夕方豊後が邸に歸つて、用人を相手にその話をするに、用人ははたと膝を叩いた。そして、  
「なる程さう承はつて初めて解せました。」

と言つて、獨りでくすくす思ひ出し笑ひをした。豊後が理由を訊くと、先刻忠成は道の通りが  
かりに、腹が空いて困るから、湯漬なりと振舞つて欲しいと言つて、座敷に上り込み、主人  
も、家來も、負けず劣らず大食をして歸つた後だと解つた。豊後守は夫を聽いて舌打をして  
残念がつた。

米が高くなつたら、道の通りがかりに湯漬の食べられる良い友達をそこらに拵へて置く事  
だ。しかし良い友達が良い狗ころよりも少いものだ。仕方が無かつたら老中でも友達にするさ。

### 人間の大小

今度の戦争で、聯合軍側の大立者は、何といても英國首相ロイド・ジョウジ氏を第一に推  
さなければならぬ。その大立者のロイド・ジョウジ氏が威爾斯生れの身長の低い、漸と五尺そ  
こそこの小男だとは知らぬ人が多い。



「昨年の春だつたか、ロイド・ジョウジ氏が南威爾斯のある都市へ演説に出掛けた事があつた。無論戦争に関する演説で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接獨逸文明の、安物の外套のやうに、裏は襦袢つ切であるのを聴くための催しであつた。其演説會の司會者といふのは、大のロイド・ジョウジ崇拜者で、この政治家の試みた演説は、どんな詰らぬものでも、みんな新聞を切りぬいて手文庫へしまつて置くといふ風の男だつた。だが、これまで一度も自分の崇拜する人に出會つた事がなかつたので、其の日は朝から胸をわくわくさせて待つてゐた。」

會場には聴衆がぎつしり詰まつてゐた。當日の演説家を案内して、會場へ入つて來た脊の高い司會者は、先づ起つて、この名高い政治家を聴衆に紹介はしたが、そのなかに次ぎのやうな言葉があつた。

「私はふだんから斯の偉人を崇拜して居りましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見掛けの堂々たるお方だと思はし思つてゐましたので、今日初めてお目にかかつて、實は驚いたやうな始末で……」

次いで起つたロイド・ジョウジ氏は、小さいが、しかし胡桃のやうなかつちりした體軀を演壇に運んだ。

「唯今承はりますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、甚く失望せられたやうな御容子で、誠にお氣の毒に堪へません。」と首相は脊高の司會者の方へ皮肉な目つきを投げた。「だが、今承はつて初めて氣づいたのは、吾々の生れた北威爾斯と此方では、人間を測るのに、標準が異つてゐるといふ事で、南威爾スでは、人間を頭から下の大きさで測るらしいが、私共の北威爾スでは反對に頭から上の大きさで大小を定める事になつてゐるのです。」

「恠う言つて、ロイド・ジョウジ氏は、自慢の大きな頭を肩の上で振つてみせた。聴衆は譯もなく嬉しがつて、頭から下の馬鹿に大きい體軀を揺ぶつて喝采した。」

### 婦人多妻主義者

米國のユウタア州は、人も知つてゐる通り、モルモン宗の本山があるところだけに、そこには鷄のやうに女房をたんと引連れた人達も少くない。



このユウター州選出の上院議員に、スムットといふ男がある。先日紐育市のある會合で紐育州生れだといふ事を訊くと、寡婦の雌鶏のやうにぐつと反身になつて近づいて来た。

「スムットさん、一寸伺ひますがお國には一人の殿方で、奥さんをたんとお持ちの方が、随分いらつしやるさうですが、眞實なんですか。婦人の言葉には、胡椒のやうな皮肉な處があつた。が、人交際の上手なこの上院議員は別に厭な顔も見せなかつた。

「眞實ですよ、奥さん。」

「失禮ですが、あなたも其のお一人なんですか。」

婦人は寡婦鶏のやうに、伸びかかつた蹴爪で、おとなしい上院議員を跳ね飛ばしかねないやうな素振を見せた。

「仕方がありませんよ。奥さん、實は土地の習慣で、私の故郷ではさうしなければならぬ事情があるのです。」

上院議員は剃り立ての顔を撫でながら、目で笑ひ笑ひ言つた。

「事情つて、ごんな事情なんです。」

婦人はきめつけるやうな調子で訊いた。

「いね、恚うなんです。奥さん方のやうな紐育婦人が——」上院議員はにやにや愛嬌笑ひをしながら言つた「紐育生れの御婦人が一人して持つてらつしやる色々な美點は、故郷の女では三四人集めなければ得られないからなんですよ。」

「まあ、お世辭のいい事……」

紐育生れの婦人は、カナリヤのやうな聲を立てて笑つた、そしてその一瞬間、この上院議員に限つて、三百人女房を持つても一向差支ないと思つたらしかつた。

### 下腹で猫が啼く

むかし小野淺之丞といふ少年があつた。隣家の猫が度々大事な雛つ兒を盗むので、ある日築山のかげで、吹矢で猫を狙ひ討にした。猫は額を射られて、後ろ足で衝立ち上つて、二三度きりきり舞をしてゐたが、その儘はたりと斃れて、辭世も何も詠まないで死んでしまつた。



氣の小さな淺之丞は、死様のむごたらしさを甚く氣に病むでゐたが、その翌る日から自分の腹のなかで、猫の啼き聲がすると言ひ出した。ある時は胸元で、またある時は臍の邊で悲しうな聲がするので、淺之丞は生きた氣持がしなかつた。

淺之丞には伯父が一人あつた。伯父といふものは借金を拵へたり、戀病に取つ憑れたり、猫に祟られたりする甥にとつては、少くとも一人は無くてならない實用品なのである。伯父は言つた。

「土の兒が猫に祟られて病死でもしたら、いい恥晒した。いつそ切腹して果てたがよからう。」

淺之丞は眼に涙を一杯溜めて伯父の顔を見た。下つ腹のあたりでまたしても猫が啼いたやうに思つた。下つ腹といへば、つい五六日前までは「武士道」と「子蓋子」との相住居をしてゐた大事な場所であつた。

淺之丞は伯父に勧められて切腹する事になつた、両親にもながの暇乞をして、やがて肌を脱いで、刀を手に取つた。介錯役に側に突立つてゐた伯父は落つた聲で呼びかけた。

「慌てるではないぞ。折角の切腹ぢや。猫の聲のする邊を目がけて、一思ひに腹に突立てるが

「こゝろ。」

「はい。」淺之丞は下つ腹を撫でながら、じつと聴耳を濟ませた。腹のなかでは猫の啼き聲どころか、鼠一匹潜つてゐる容子も見えなかつた。

「今朝方までは確に啼いてゐましたつけが……」淺之丞は臍のまはりを指先で押へてみた。「今一向聞けません。」

「そんな筈はない、氣を落ちつけてよく聴いてみるがいい。」

淺之丞は身體ちゆうを耳のやうにして聴き入つたが、何一つ聞けなかつた。

「一向に猫らしいものの啼き聲は致しません。」

「猫め、それぢや逃げたかも知れんぞ。」伯父は聲を立ててからからと笑つた。

「逃たものなら仕方がなからう今更切腹にも及ぶまいて。」

甥は手帛のやうに眞つ青な顔をして、短刀を白木の鞘に納めた。猫の逃出した下つ腹では、いつの間にか「武士道」と「子蓋子」が歸つて来て、墓のやうに遠慮して、そつと溜息をついてゐた。



珍らしい廣告

倫敦タイムズの近刊號人事欄に次のやうな廣告が載つてゐる。  
 「私は結婚前の若い紳士ですが、私に結婚をすつかり思ひ止まらせて下さる先輩の方がいらつ

しやるなら、御近づきになりたいものです。」

これを數多い廣告のなから拾ひ出した米國の雜誌記者は、奇妙な廣告だ、珍しい廣告だ、滅多に見かけられない廣告だといつて矢鱈に吹聴してゐる。

結婚は悪い事ではないが、あひにく相手が要るので、兎角思ふに任せぬ事が多い。それに女の註文が段々高くなつて來るのは、男にとつて何よりも荷厄介である。すつと以前は女といふものは、亭主が男でさへあれば辛抱したものだ。が今では天使でなくつちや逆も氣に入らない。ところが、多くの場合男は女にとつて天使どころか、牛のやうに鈍間で、おまけに牛のやうに獸物である。

男が女にとつて牛であるのと同じやうに、女は男にとつて蝙蝠である。謎である。多くの男

は生れるときから、死ぬるまで女の爲に苦勞をしてゐるが、さういふ男でも、一生の間に少くとも二度はからきし女を理解し得ない時期があるものだ。二度といふのは、一度は結婚前で、一度は結婚後の事をいふのだ。

世の中には結婚したがつてゐる男も少くはなからうから、その人達のために言つておくが、諸君が獨身で通したからといつて、失望する女はまさか二人とはあるまい。よしんば失望したところで、その人達は直ぐ絶念められるに相違ない。ところが、諸君が結婚すると、一生涯失望し続ける人がある。その人は他でもない。細君である。

同じ時分、巴里の「フィガロ」新聞に次のやうな廣告が載つてゐた。

「上流の家庭にある鸚鵡の發音が悪いのを直すために、正確な佛蘭西語の出来る教師を雇ひた

のである。断つておくが、發音の悪いのは、上流家庭の夫人では無くて、夫人よりも口數の少ない鸚鵡なのである。

鸚鵡に佛蘭西語の巧い教師を雇ふといふと、一寸見は贅澤なやうだが、鸚鵡に訛を喋舌らし



ておいて、じつと辛抱してゐるよりか、きれ程節儉につくか知れたものではない。佛蘭西に文學が衰へないのは、鸚鵡の訛を氣にしないではゐられない程。國民が國語に敏感なところも一つの原因になつてゐる。多くの代議士に狗のやうな日本語で喋舌らしておいて、黙つて夫を聴く事の出来る日本人の無神経さが熟々思はれる。

### 生命の勘定

富豪ロスチャイルド男が、熱病にひき苦しんだ事があつた。ちやうど男が七十五歳の折の事で、齡も齡だから老人自身も逆も助からないものと斷念めて、

「乃公も今度こそ色々お暇をだ。」

と、毎日のやうに溜息ばかり吐いてゐた。

お抱への醫者は、朝に晩にやつて来て、老人の脈を押へたり、咽喉を覗いたりした。咽喉を覗く折には、老人は野鴨のやうにあぐり口を開けて仰向いた。すると醫者は叮嚀に見終つて、

「いや、大した事はございません、程なく御全快になりませう。」

と、請合つたやうに言つた。だが、醫者の言葉通りにも怪かないものと見えて、病氣は重る一方だつた。

皮肉屋のトルストイは、死際に枕もこに立つてゐるお醫者達の顔をじろりと尻目にかけて、「この人達は醫者の學問にかけたら、みんな知りぬいてゐるんだが、その醫者の學問といふ奴が、何一つ判つてないんだから困る。」

と、呟したといふ事だ。だが、それはトルストイが無理なので、學問の餘り頼みにならないのは、何もお醫者のみに限つた事ではない。

病氣は重くなる一方だつたので、ロスチャイルドは床のなかで神経を針鼠のやうに尖らせて口癖のやうに「今度こそいよいよお暇をだな。」

と呟き通してゐた。醫者は例のやうに叮嚀に診察をしたが、自分の診察の届かないところは、お世辭を使ふ外には仕方がないといふ事をよく知つてゐたので、

「御前、大丈夫でございます、此御容體ちや百歳までは屹度お請合が出来ます。」と言つて、



れ隠しにお辭儀を一つした。

「百歳まで。」名高いこの資本家は、夫を聞くにむつくり頭をもち上げた。「それは大變な損だよ、神様がそんな御損な算盤をお持ちになるといふ法はない。七十五で取引の出来るものを百までも出すなんて……」

大事の自分の生命までを、戦時公債なみに取扱つてゐるのは、いかにも資本家らしくて面白いが夫よりも感心なのは神様の勘定だかいのを、ちやんと見ぬいた所にある。

### 慈善家の心得

鎌倉の圓覺寺に、誠拙和尚といふ坊さんが居た。ある時三門を拵へようとして、弘く佛縁のある人達から寄進を募つた。すると、その頃札差をしてゐた梅津傳兵衛といふ男が、心ばかりの寄附につきたいからといつて和尚を訪ねて來た。傳兵衛は膨まつた懷中から、嵩高な金包を取り出して和尚の前に置いた。

「和尚様、ほんの聊かではござりますが、ここに金子が五百兩ござりまするから、今度の三

門の御建立へ是非お加へおき下されまするやうに。」

和尚はちらと金包を見たが、

「あ、やうかい。」

と言つたとき、直に眼を外つ方に逸らした。

傳兵衛は不平で堪らなかつた。五百兩といへばなかなかの大金で、これだけあつたら女一人の靈魂を買ふ事も出来るし、男の運を買ふ賭博をも打つ事が出来るのだ、それを知らない和尚でもない筈だ。と、傳兵衛は思うしながら、態々覗き込むやうに和尚の顔を見た。

「ほんのほつちりでは御座りますが、五百兩だけ御寄進申し上げます。」

「さうか、よしよし。」

和尚はまた一言言つたとき、矢張り外つ方に向けて素知らぬ風をしてゐた。

傳兵衛は幾らか腹に据ゑかねた。幾ら出家の身とは言ひながら、他人から寄進を貰つて、あの素振は蟲が善すぎる。五百兩といへば、かなりの大金だ、自分がこれだけの金を儲けるには頼に玉のやうな汗も流した。嘘も幾度か吐いたが、夫を今惜氣もなく寄附しようといふのだ。



和尚はそのお禮として、來世で自分に特別上等の居所を取持つてくれる程の信用はないにしても、今少し丁寧な挨拶があつても宜かりさうなものだ。傳兵衛は少し言葉に角を立てた。「和尚様、五百兩を申しましたところで、當山におかせられましては何のお役にも立ちますまいが、私にござりましては、聊か身分に過ぎた寄進か存じます。就きましては何か一言の御挨拶を下されまして……」

「禮が言つて欲しいと言ふのか。」

此方向きに向き直つた和尚の眼は、蠟燭のやうに光つた。

「御意にござりまする。」

傳兵衛は木兎のやうに頬を膨らませた。

「馬鹿な。お前が善根するのになぜまた俺が禮を言はなければならぬのか。」

和尚の聲は挽臼のやうに上から落ちかかった。その下に押し潰されたお伽譚の猿公のやうに、傳兵衛は疊に顔をすりつけて眼を白黒させた。

そんじよそこらの慈善家もよくよく心得てゐて欲しいものだ。

## 大阪の道路

近頃の大阪市の道路はさびしいものを自分はまだ見た事がない、少し雨でも降り續くと、道といふ道は、まるで煉味噌のやうに滑つてしまふ。すべて頭でも道でもよくするには、金が懸るものだと信じてゐる大阪人は、それでも黙つて辛抱して、馬のやうに抜脚して、そのなかを歩き廻つてゐる。

十八世紀の初め頃、埃太利の維也納の市街が恰きそれで、雨降りの日にでもなるに、道路は大ぬかりにぬかつて、市民は外へ出るのが億劫でならなかつた。その頃の宰相はロブコウキチ公といふ政治家で、ひきくそれを苦に病んで、幾度か市民あてに訓令を出しは出したが、市街はいつまで経つても少しも綺麗にはならなかつた。

宰相は一思案した。で、ある日の事、市長を官邸に招待した。蛙のやうに泥濘に住む事の好きな市長も、目上の人から招待される有難さは知つてゐた。その日になると、市長はしつくりと禮服を着込み、絹製の襪に、おろし立ての靴を穿いて、大威張りで出かけて往つた。



宰相はにこにこ顔で出迎へてくれたが、一言三言話してゐるうちに急に顔を曇らせた。「今日は君のゆつくり落ちついて話したいと思つてゐたのだが、急に差迫つた用事が起きたので、これから出掛けなくつちやならん。ついてはお氣の毒だが、私と一緒に馬車に乗つて途々用談を聞いてはくれまいかね。何ならお宅の前で車をとめるから、君の馬車は返したがいいぢやないか。」

宰相の馬車に相乗が出来た事だつたら、市長は靴をなつても厭はない程だつたので、二つ返事ですぐ承知して、自分の馬車は先へ返した。そして大めかしにめかし込んだ姿で、宰相の側に腰をかけてゐた。宰相は途々馬や、お天氣や、英吉利の政治家の噂なぞそんな下らない事ばかり話して、用談らしい事は一向暖にも出さなかつたが、馬車が維也納でも名うての汚い町へ入つて來ると、急に慌て出した。

「これは怖ろしく汚い道へ出た。すつかり道を間違へたものと見える。氣の毒だが君には下りて貰はうぢやないか。もう約束の時間に間も無いのに、これからまた後がへりをしなくちやならないんだからね。」

市長は馬車の扉をあけて外を見た。町は泥田のやうにぬかつてゐた。市長は自分の禮服を見、絹の靴を見、おろし立ての靴を見て泣き出しさうな顔になつた。

「これぢや、逆も歩けさうにありませんから、もし先きまで御一緒に願はれますまいか。」

「それは可かん。何分時間が差違つてゐるんだから。」

宰相はきつぱりと跳つた。

市長はすつかりあきらめたらしく、いきなり馬車を飛び下りた。そして蛙のやうな恰好をして泥濘のなかを泳ぎ廻つた。宰相は馬車の窓から夫を見おろして聲を立てて笑つた。

お蔭で、それから暫くすると、維也納の市街は見違へる程立派になつた。大阪の市街に困つてゐる人達よ、一度雨降りの日に自動車の窓から池上市長や市會議員や泥濘のなかに投げ出してみたらぎんなものだらう。理窟よりも實物教育の解り易いこの人達だけに、案外効があるかも知れない。

### 落錢を拾ふ樂み



「世の中に何が嬉しいといつたつて、途で落したお鳥目が自分の手に還つた時の氣持ほごいものはございませぬ、お上人様は御存じでいらつしやいますか。」  
 恚ういふ話を良寛上人にしたものがあつた。上人は言ふ迄もなく、越後國上山の五合庵に棲むでゐた名高い禪僧である。

この話をした男だつて、世の中には外にもつと嬉しいことがたんとあるのは知つてゐたらしいが、行ひ澄ました良寛に、そんな話も出来なかつたものだから、精々落したお鳥目位で済ます事にした。

良寛は夫と聞くに、不思議さうな顔をした。そして汚れた巾着から散錢を二つ三つ取り出して、態と道の上に落した。お鳥目はかちんと音を立てて、上人の脚もで二三度くるくると舞つた。

良寛は手をのぼして其の散錢を拾つたが、格別變つた氣持もしなかつた。

「一向嬉しくない。何うしたもんだらう。」上人は呆けた顔をしてちつと考へ込んだ。「もつとんと落さなくちやならないか知ら。」

先刻から上人の素振を見て、馬のやうににやにや笑つてゐた男は、一寸小腰をかがめた。お上人さん今一度試みて下さい。さうしたら屹度お判りになるだらうと思ひます。」

良寛は巾着に入れかけてゐた散錢を取り出して、また道の上に落した。散錢はお上人に當てつけたやうに、其邊をころころ轉け廻つてゐたが、いつの間にか草のなかに滑り込んで、そのまま姿を隠してしまつた。

良寛は手を延ばして、そこらを投し廻つたが、お鳥目は一向顔を見せなかつた。僧侶さんはうろたへ出した。禿た頭を唐茄子のやうに眞つ赤にして、草のなかを掻き分けてゐたが、暫らくしてやつとこさで見つかつた。上人は汗ばんだ顔を持ち上げた。

「なる程嬉しかつたよ。ほんとに嬉しいもんだな、落した錢を拾ふといふものは。」

### フオツシユ將軍と葉卷

當今聯合軍での大立者といつたら、十人が十人まで佛蘭西のフオツシユ將軍だといふのに異存があるべくもない。その將軍に多くの人と異つた一つの癖がある。



癖——といふと、荒つぱい日本の將軍達に少しでも近づきを持つてゐる人だ、直ぐ口を尖らせて、

「それは屹度、厩のかへりに馬を撫でたその掌面で、夫人の戸杓を思ひきり擲しつける癖なんだらう。」

と言ふかも知れない。それも一つの立派な癖には相違ないが、フオツシユ將軍のは、そんな風なの少し違つてゐる。

將軍の癖といふのは葉巻の喫かし方で、將軍は今度の戦争が始まつてから、今日になるまで、たつた一本の葉巻しか喫かしてゐない。といふと、こんな正直な人でもが、

「たつた一本の葉巻だつて、戯談言つちやいけない。戦争が始まつてから今日までもう幾年に

なると思つてゐるのだから、實際將軍はたつた一本の葉巻しか持つてゐないのだから仕方がない。

その一本の葉巻を將軍はいつも口に啣へてゐる。食事の時は叮嚀に卓子の上にそつと夫を置

き、食事が済むと、またそれを啣へてゐる。恙うして朝起きる頃から、夜分寢床に入るまでその同じ葉巻を啣へ續けてゐる。尤も一度だつて、その葉巻に火を點けた事はない。將軍の言ふのは、この人は生れてから今日まで、まだ一度も火の點いた葉巻を喫かした事はないさうである。

「火の點いた葉巻からは煙が出る。私は煙には堪へられない。」

將軍は軍人にしては少し上品過ぎる顔をしかめて、言ひ言ひしてゐる。

葉巻といへば、米國では引續いて三代も葉巻一つ喫かさない大統領が續いてゐる。

ルウズヴェルト

タフト

ウイルソン

### 細菌を飲んだ化學者

いづれもが、揃ひも揃つて煙を好かない人達である。

學者や藝術家といふ輩には、自分の研究や作物やに熱中し出すと、つい自分をも、世間をも



忘れてしまふやうな人がよくある。況して晩飯や借金の事などは。歴史家のモムゼンはさういふなかでも、一番よく物忘れをする人だった。

ある日の事、モムゼンはいつものやうに書齋へ入つて、何か調べ物をしてゐた。ちやうど時分ぎきになつたので、下男は料理をもつて入つて来たが、主人の歴史家は唯もう仕事に氣をこられて、一向食事の事など考へてゐないらしかつたので、下男は側の卓子の上に皿を置いて下つて来た。

暫くして、下男は二皿目を持つてまた書齋に入つて来た。先刻の肉汁は匙もつけないうで残つてゐたので、代りに次の皿をおいて、前のはその儘下けて来た。そして料理部屋で舌鼓を打ちながらこつそりそれを食べた。こんな場合にも盗み食はうまいものであるが、とりわけ學者が氣むづかしい顔をしてゐる隣りの室でする盗み食はまた格別のものである。

下男はまた三皿目を持つて来た。歴史家が羅馬大帝國の事に頭をつかつてゐる間に、二皿目のピフテキはもう冷たきつてゐたので、下男はそれをも下けて、次の室で食べてしまつた。それから物の二時間も経つと、モムゼンが疲れたやうな顔をして臺所へ入つて来た。

「おい、もう時分ぎきを大分過ぎてゐるやうだが、まだ午飯は食べさせないのかね。」

「午飯ですつて。下男は態としらばくれた顔をして笑ひ出した。『まあ、旦那様とした事が、お午飯は先刻召しあがつたばかりぢやございせんか。』」

「わつ、もう食べたつて。さうかなあ。」と、この偉大な歴史家は両手でもつてべこべこになつた横つ腹を押へてみるらしかつたが「なる程さう聞いてみるゝ食べたやうだわい。うん、食べた食べた、確にお午飯は食べた。いや、飛んでもない事をいつて済まなかつたよ。」

歴史家はほんごに済まなかつたやうに頭を掻きながら、また書齋に歸つて往つた。

パスツウル研究所の創設者ルイス・パスツウルは名高い化學者だったが、この人もモムゼンと同じやうに、さうかするゝ自分を忘れる性であつた。ある時娘の家に往つて、櫻實を襲はれた事があつた。娘は木の實を入た籠に、水を盛つた井を卓子の上に置いた。

「阿父さん、これ拗り立ての櫻ん實なのよ。埃や毛蟲の卵がくつ着いててもいけないから、一粒づつこの水で洗つて召しあがれよ。」

「うむ、よしよし。」



## 胃の腑

老つた化学者は娘の言なり通り、さくらんぼを一つ宛叮嚀に井の水で洗つて食べてゐたが、暫くすると籠のなかは空っぽになつた。すると化学者は手を伸ばして井を取上げた。そしてそれを唇に持つて往つたと思ふと、なかの水をぐつと一息に飲み干してしまつた。埃も、黴菌も、毛蟲の卵も。

むかし松平不昧公が、京都に上つた時、ある日の事、茶人千宗佐を訪れようとして、前もつて其の由を通じておいた。宗佐は相手が不昧公だといふので、色々趣向を凝らした午餐の用意なしておいた。——一體茶人の料理といふものは、味よりも趣向のもので、趣向さへ氣に入つたら、お膳のものは言ふに及ばず、皿を食べ、椀を食べ、おまけに亭主役の禿頭を食べたつて少しの差支もないのだ。

不昧公は千家へ行く途中で、急にその日は大徳寺に寶物の蟲干がある事を思ひ出した。「さうだ、蟲干を觀に往かう、宗佐へは歸り途にしたつて遅くはあるまい。」

不昧公は先きに大徳寺の方へ廻る事にした。蟲干には色々珍しい物があつたので、この風流大名は思はず時を過ぎた。寺の門を出たのは午も大分過ぎてゐて、べこべこになつた胃の腑のなかでは、先刻蟲干で見た吳道子の觀音さまや、一休和尚の木像やが空腹さうに欠伸をしてゐた。

千家では、また宗佐が欠伸ばかりし續けてゐた。不昧公が着いたのは、欠伸が中つ腹と變つてゐた時なので、前々から凝した饗應の趣向も、すっかり臺なしになつてゐた。亭主はお客を茶席へ通すと、薄茶を一服出しておいて、素知らぬ顔をしてゐた。腹の空いた大名は、次の室の物音にじつと聴耳を立てゐたが、別段膳部を用意するらしくもなかつた。

不昧公の胃の腑は深く宗佐を怨んだ。これまで空腹といふ事を知らなかつた大名の頭腦は、急に胃の腑の味方をして、何かしら復讐の趣向を考へるらしかつた。

その翌る年、不昧公は江戸の邸へ宗佐を招いた。宗佐は名高い大名の折角のお招きだといふので、出来るだけ供をたんと連れて、供には挟み箱や長刀なごも擔がせた。そして大威張りで海道筋を練歩かせたものだ。



不昧公は江戸の邸で遙にその噂を聞き傳へた。胃の腑はいつぞやの復讐の時が来たのを思つて小躍りした。不昧公は用人を呼んで、何か知ら言ひつけた。用人は急いで品川の宿まで出掛けて往つて、茶人の一行を待ち受ける事にした。仰々しい宗佐の行列が來かかると、松平家の用人は龜斯のやうに表へ飛んで出た。そして不昧公からだといつて、大きな金包みを宗佐の鼻先きに突きつけた。

「折角お招きは致したが、殿は俗腹のお手前はもう厭になつた。仰せらるるによつて、お氣の毒ではござるが、ここからお歸り下さるやうに。」

怒う言つて、用人はさつと引揚げてしまつた。宗佐は化かされたやうな眼つきで、いつまでも其の後姿を見つめてゐた。

何事も胃の腑から起きた事だ。胃の腑からはこんな事でも起きるものだ。

### 獨帝の拳骨

戦争になつてからは、然う暢氣な事も出来ないが、柏林の市中では、いつも大晦日の夜は、

市街を歩く人達が、出合頭に誰彼の容捨はなく、いきなり拳を固めて帽子の頭をほかりと擲りつける事が流行る。

今の獨帝は人一倍この遊びが好きで、皇帝の位に即いてからも、大晦日の晩になると、こつそりお忍びで市街へ浮れ出し、擦れ違ひざまに他人の隙を見てはほかりと擲りつけたものだ。誰彼の容捨なく、他人の帽子を擲りつけるといふのは、年中頭ばかり下けて暮してゐる人達にとつて、實際胸の透く遊戯に相違なからうが、獨帝のやうに、朝から晩まで内閣の大臣達にお辭儀をさせ通しにさせてゐる者は、もつと他の遊びを好いてもよかりさうなものだ。

しかし獨帝は好きな事をするのに、誰に遠慮は持たない性分である。その上一つ間違つたら、相手から自分の帽子を擲りつけられるといふ心配があつてみれば、獨帝は何うしても此の遊びを捨てる譯に往かなかつた。

ある歳の大晦日の晩、獨帝はいつものやうにお忍びでこつそり市街へ飛び出した。明るく灯の入つた市街には、自分の頭を庇ひ立てるやうにして、尻目に他人の帽子を覗つてゐる人達がうようよしてゐた。獨帝は急ぎの用事でもあるらしゝ顔面で、其なかに紛れ込んで往つたが、



擦れ違ひざま牛のやうな呆けた顔の男を見ると、いきなり拳をあけてほかりと帽子を叩きつけた。

その瞬間、獨帝は眞青になつて、帽子から拳を引き外した。見ると、白い手首に眞紅な血がたらたらと流れてゐる。獨帝は恨めしさうに其の男の帽子を覗き込んだ。帽子の山からは釘が二三本頭を覗けてゐた。其の男は釘仕掛を發見られると、慌て帽子を脱いで小脇に抱へ込んだ。そしてセルロイド製のやうな禿頭をふりふり群集に紛れ込んだ。

獨帝はぶつぶつ呟きながら宮城に引きかへした。そして侍醫の鼻先に血だらけな拳骨をぐつと突き出した。侍醫は叮嚀に糊帶をした。

## 首を繋ぐ法

和蘭のアムロンゲンの城に落のびた前の獨逸皇帝は、近頃頗る何か書き物をしてゐるといふが、その書き物は何であるかといふ事は、誰一人知つた者もない。しかし此の人が辯疏がましい隠し立なきしないで、あけすけに、公然に、今度の戦争の事情を懺悔したら、きんなにか面

白い書物が出来るだらう。歐羅巴の外交家達は、その懺悔録の前で、眞つ赤になつて馬のやうに鼻を鳴らしたり、狗のやうに取つ組合を始めるに相違ない。

そのむかし、獨逸にシユレエツエルといふ外交官があつた。時の宰相ビスマルクに睨まれて、だしぬけに休職といふ辭令を請取つたので、強て平氣な顔をして宰相に挨拶に往つたものだ。宰相は肥つた體軀を椅子にもたせて、何か善くない事を考へてゐたらしかつたが、この休職外交官を見ると、急に拵へたやうな愛想ぶりを言つた。

「君もやつと閑な身體になつたといふものだが、これから何を爲るね。」

「さあ、何を致しませうね。」外交官は落つき拂つて返辭をした。「當分はまあ宅に引込んで、回想録でも書くんです。御存じの通り、私も長らく官海にゐたものですから、随分いろんな事を見聞してまゐりましたよ。夫れを一つあけすけに書いて見たらと思ひましてね。」

ビスマルクは鷲のやうな怖い眼つきをして、じつと客人を見つめた。この外交官はその頃名うての筆まめな男で、勢みに乗るきんな皮肉を書き出すか判らなかつた。物もあらうに、回想録は、聞く身にとつて如何にも氣持が悪かつた。



「回想録もよからうが、茲で一つ君に相談があるんだがね。」ピスマルクは椅子から心持乗り出して来た。「今米國公使の椅子が空いてゐるんだが、君は往つてくれないかしら、往つてくれると實に都合がいいんだ。」

「参りませう。さういふ思召でしたら。なに回想録なんか何時でもいい事なんですから。」外交官は二つ返事で直ぐ承知した。二人は眼と眼を見合はせてにやりと笑つた。

前内閣の閣僚なども、役人を止めた所在なきに、一つ回想録でも書き出してはみんなものか知ら。間がよくば、そんな事は後廻しにして、大使にでも往つてくれと、誰が頼むまいものでもない。

### 天國に結婚のない理由

結婚といふ事は、人間のする仕事のうちでは、あまり立派なものではない。それは賭博や編物と同じやうに、外に何も仕事のない時にするほんの閑潰しで、歌を詠むとか、畫を描くとか、そんな結構な仕事を知つてゐる人達にとつては、結婚なぞ成るべくしない方がいい。だから、

基督も天國では「娶らず、嫁かず」だと言つてゐる。天國のやうな結構つくめなきところでは、結婚は賭博と一緒に御法度となつてゐるのだ。

説教家としては、米國で第一人者と言はれたパイチャアが、ある時教會で得意の説教をした。説教はいつに異らず面白く出来たので、パイチャアは上機嫌で教會を出ようとした。

すると、それまで出口に衝立つてゐた妙齡の美しい娘が、一寸會釋をしてこの説教家を呼びとめた。

「先生、ちよいとお伺ひ致しますが——」娘は嬌へたやうな身振をした。「天國には結婚が無いやうに福音書に書いてありますが、あれは眞實なんでございませうか。」

パイチャアはじつと娘の顔を見つめた。娘はチョココレエトよりも、お芝居よりも、一番「結婚」が好きらしい口もとをしてゐた。

「眞實ですよ。天國には結婚なんてものはありません。」

「何故でございます。」娘は此の世で結婚をした上に、天國でも今一度結婚したさうな口振で訊きかへした。



「それは、何でせう——」と牧師は皮肉な返事をした。「天國には女といふものが居ないからでせうて。」

「天國には女が居ませんで——」娘は軍鶏の牝のやうに屹となつて顔をあげた。

「違ひますよ。先生。そんな理由で天國に結婚が無いんぢやございませうまい。」

「ぢや、どんな理由で？」雄辯な牧師は覗き込むやうにして訊いた。

「それはね、憊うなんでございませうよ。」娘は石のやうな白い歯を見せてきつぱり言つた。「天國ではお嫁入しようにも、肝腎の式をあけて下さる牧師さんなんて方は、一人も居ないからなんでせうよ。」

### 名醫後藤新平男

男爵石黒忠憲氏は、今では茶人らしく十徳を着込んで、お茶を啜つたり、若い者の嫁を捜したりして、日を暮してゐるが、實をいふと、氏はあれで軍醫總監なのである。尤も氏自身も自分が軍醫だつたのは、夙の往時に忘れてゐるらしく、偶に人が醫者の話でもするに、氏はま

だ見ぬ地獄の取沙汰でも聞くやうに、變な顔をして耳を傾けてゐる。

こないだの事、あるところに宴會があつて、石黒氏も尖つた頭で夫に列席してゐた。氏のすぐ次ぎに肩を並べて坐つてゐたのは、世間のいふ成金の一人で、魚のやうな青白い顔に、魚のやうな圓い眼をした男だつた。その男は自分の上手に坐つた禿頭が石黒氏だと知ると、懷中から大きな名刺を取り出して、石黒氏の膝の上に置いた。

「私は憊ういふ者でございませうが、先日中から一度あなたにお目に懸りたいと存じまして……」

その男は叮嚀に頭を下けた。石黒氏は慌てて眼鏡を取り出して名刺を讀んだ。名刺は手巾ほぎの大きさに見えた。

石黒氏は眼鏡越しに相手の魚のやうな顔を見た。

「いや、お初めて。何か御用でもおありかな。」

「はい一度お閑の節に女房の御診察をお願い致したいと存じまして……」その男は圓い眼を忙しさに瞬きした。「こないだちうから肋膜炎を罹ひまして、方々の先生方に……」



「駄目だ駄目だ。」石黒氏は相手の鼻先で大きな掌面を揮つた。病身な成金の女房位だつたら、一思ひに絞殺されさうな大きな掌面である。

「乃公に診て貰はうと思ふには、生命が二つ無くちやならんが、夫は御存じだらうな。」

「へ、生命が二つ？」成金の男は不思議さうな顔をして考へた。だが幾度考へても、自分の女房は乳房と良心とを二つ死持てゐる代りに、生命はたつた一つしか持つてないらしかつた。

「驚いたらうな、生命が二つ要るんぢや。」石黒氏はにやにや笑ひながら言つた。

「だが、ここに一人生命が三つもなくちやとて診て貰へない醫者がある。貴公は其の人を御存じかな。」

「いね、存じません、きなたでいらつしやいます。」

その男は魚のやうな目であたりを見まはした。

「あそこに居る、那の鯨子張つた男だ。」

石黒氏は床の間に近く坐つてゐる刈髻の男を指さした。見るに男爵後藤新平氏だつた。

### タフトとお菓子

米國の前大統領タフト氏は、法律事務でよく旅をするが、旅先で滅多に故障に出會つた事もなく、おまけにいつの旅立にもお天氣が多いので、「乃公ほき旅の間が好い者はなんぢあるまじ。」

と、あの大きな圖體を揺ぶつて、ひそりで嬉しがつてゐる。

最近に西の方へ汽車旅行をした事があるが、其の時何うした間違か、鐵道に故障があつて、汽車は寂しい田舎町に停つたまま前へ進まなくなつた。

「乃公が乗込んでゐる汽車だ、こんな筈は無いんだがな。」

と、タフト氏はぶつぶつ呟きながら、動物園の獸のやうに大きな顔を列車の窓から出して、其邊を見まはしたが、ビスケットの空罐のやうな小つほけな停車場には、タフト氏の好きな神様など居ようとは思はれなかつた。

タフト氏は大きな旅靴を履けて、のつそり列車のなかから出て來た。そして停車場前の薄汚



い旅籠屋に尻を落ちつける事にした。線路の修復はかなり手間が取れるので、汽車は明日の朝までは迎も出さうになかつたからである。

入つて来た旅籠屋の亭主はお客の大きな圖體を見て、變な顔をしたが、その名前を聞くに、慌てて丁寧にお辭儀をした。そして名高い前大統領に一夜の宿を貸す事の出来た自分の仕合せを心から喜んだ。

其の次ぎの瞬間、亭主は自分の家に持合せの寢臺が、いつれも安物づくめな、脆い出来であるのを思ひ出して、當惑さうな顔をした。で、早速の氣轉で、お客の重みで寢臺が押し潰れないやうに、鐵線でもつて、方々を蜘蛛の巣のやうに絡めにかかつた。

夜があけて、タフト氏が朝食の席につくと、亭主は採み手をしながら御機嫌伺ひに出て来た。「旦那様、いかがでございました。よくお寝みになられましたか。」

「有難う。いや、よく眠れたよ。」と前の大統領は何だか思ひ出し笑ひをするらしく、顔を歪めた。「だが、今朝眼がさめて自分の寝相を見るに、乃公の身體が寢臺の外に食み出してゐて、まるでワッフル(お菓子)のやうだつたよ、は、は、……」

人間は時々自分をナポレオンやソクラテスに比べるやうに、お菓子や眼藥の埒にも比べてみる必要がある。自分がお菓子に似てゐるなと思ふのは、英雄に肖てゐると思ふよりも、何うかすると心強い感じを與へるものだ。

### 俘虜紹介状

英國の陸軍將校をたんとぶち込んでゐる獨逸の俘虜收容所に、一人の軍曹がある。神信心の深い方で。

「汝の敵を愛せよ。」

と言つた耶蘇の言葉を文字通りに取つて、氣の毒な俘虜を並外れて勞はるところから、いつてなく其處にゐる人達と懇意になつて、毎朝顔を見合はすと、仲のいい友達のやうに、につと笑ふ程の仲になつた。

ある朝の事、軍曹は洋袴の隠しに兩手を挿し込んだ儘、妙に悄氣た顔をして入つて来た。それを見た俘虜の一人が訊いた。



「何うしたい、ひきく滅入つてるぢやないか。」

「いよいよお別れが来ました、二三日中に貴方方に別れなくつちやならんかも知れん。」軍曹は狗のやうに悲しげな眼つきをして言った。

理由を聞くも、自分はいつ迄も收容所にて、氣の毒な敵を愛したいのだが、今度愈々戦地へ送り出されて、前線へ立たなければならなくなつたといふのだ。

「僕は戦線へ立つと、屹度俘虜になるやうな氣がしてなりません。」軍曹は玩具の笛のやうな悲しげな聲で言った。「で貴方方に一つお願があるんですが、肯いては戴けないでせうか。」

「願ひといふ……」將校の一人が榮養不良の顔を出しながら訊いた。

「外でもない、紹介状を書いて貰ひたいんです。俘虜になつた折の……」軍曹は言ひ難さうに頼んだ。「收容所にぶち込まれても、僕だけは成るべく別取扱がして貰へるやうに……」

英國の將校達は顔を見合せて笑つた。そして言ふ事が面白いからと言つて、早速英語の紹介状を一通書いて渡した。軍曹は無論英語は讀めなかつたが、にこにこもので、幾度か禮を言つてポケットに押し込んだ。

軍曹は戦線へ出るに案の定蘇格蘭兵と戦つて俘虜になつた。そして將校の前へ引出されるに、待設けてゐたやうに内ポケットから、例の紹介状を出した。將校は不審さうに眉を擡めて、夫を讀み下してゐたが、暫くすると腹の底から揺り上げるやうに笑ひ出した。手紙には恚う書いてあつた。

「この男はしこい軍曹です、悪い奴ぢやありません。別扱ひにして欲しいと言ひますから、一度に撃殺しないで、ゆつくり苛め殺してやつて下さい。」

## 大臣の顔觸

いよいよ原氏が内閣を組織した。閣員の顔觸もやつと定つた。政友會の領袖で、この顔觸に洩れた人達は、「原の白髪頭め、俺の事を忘れろのか知ら。恚う見ても俺だつて立派な大臣級だ。」

と内々呟いてゐるまいものでもない。

原敬氏がこの自惚を、どんな鹽梅に取扱ふかは見物である。これを巧く利用したものこそ徳



川家康がゐる。ある時何かの席で、福島正則が家康にお追従を言つた事があつた。那の武骨者にお追従がご不思議がる人があるかも知れないが、無骨者はよくお追従を言ふものである。

「数多い御家來衆のなかで、井伊氏と本田氏と榊原氏とは、實に天晴の武勇で、この三人こそは御當家の重寶かご存じまする。」

正則は慙う言つて、獸が媚びをする折のやうな眼をして家康の顔を見た。家康はその折もいつものやうに態をらしくにこにこしてゐた。

「然うぢや、右の三人は無敵傑れては居るが」家康はいつもの癖で、硬ばつた掌面で軽く膝頭を叩いた。「しかし當家の重寶といへば、強ちこの三人には限らぬ、少く見積つても先づ十人はいゝな。」

「なに、十人と仰せられまするか。」正則は吃驚したやうに眼を一杯に睜いた。

「うむ、確に十人はござる。家康はその十人を革財布にしまつて、懷中に捻ぢ込むでもあるやうに、きつぱりと言つた。

「すりや、残の七人は誰々でござりまするな。」

正則は木の株のやうな岩丈な膝を乗り出して來た、家康は絞さうな眼つきで、ちらちら正則の容子を見てゐたやうだつたが、だしぬけに

「は、は、は……」

と大聲をあけて笑つた。正則は何が何だか分からないで、馬のやうに鼻面をくしやくしやさせた。

家康の狸爺め、十人といつて置けば、数多い家來達がいつか夫を聞き傳へて、

「あとの七人は誰々だらう——俺もその一人かな。」

と、めいめい屹度武勇を勵むやうになるだらうといふので、態を慙うした人喜ばせを言つたのである。

原敬氏に教へる。人が大臣選定の苦心でも訊いたなら、態を顔をしかめて、

「さうだな。今度ほど困つた事はなかつた。何しろ政友會には大臣級の人物がざつと四十七人もあるのだからね。」

と言つておく事だ。四十七は赤穂義士の數でもあり、いろは文字の數でもある。その通俗な事



にかけては、馬鹿者の多い政黨員にとつて、何よりも分り易い數字である。

### 接吻か二十弗か

メリー・ガアデン嬢がいへば、今は巴里に住んでる、米國で名うての首歌妓だが、ある劇場の稽古場で、大事の寶を失くしてしまつた。一體劇場の稽古場といふところは、よく物を失くしたり、拾つたりするところ、坪内逍遙博士が一枚看板の女優を失くしたのも、島村抱月氏が大事な「戀」を拾つたのも、みんな劇場の稽古場だといふ事である。

メリー・ガアデン嬢が失くしたのは、戀でも母親でもなかつた。女優の身では何うかすると、戀よりも母親よりも大事にしなればならぬ苦の大粒の眞珠であつた。嬢は血眼になつて捜したが、かいくれ分らなかつた。で、一座の者に申し渡しをして、眞珠を拾つてくれた者には、接吻か、二十弗か、どちらかをお禮にしようといふ事に取り極めた。

「接吻がして貰へる……」

皆は熱病を患つた様な眼つきをして、稽古場を捜し廻つた。すると、年の若い道具方の一

人が、小道具のなかで件の眞珠をみつめた。女優はここにこのもので夫を受取て身につけた。

「有難う。お禮は執方にした方が良いの。接吻か？」女優は美しい眼で道具方の顔を見た。化粧石鹸でよく洗つた上に、香水でも振りかけなければ、逆も接吻が出来さうな顔ではなかつた。「それとも二十弗の方にするの。」

「へ、……手前接吻は大の好物なんでけすが……」道具方は、薔薇のやうな女優の唇を見て狗のやうに卑しい眼つきをした。「でも、お腹には代へられやせん、廿弗の方を戴きやせう。」それから二三日経つて、メリー・ガアデン嬢は、富豪のアンドリウ・カアネギイ氏に出會つて、この話をした。

「道具方め、若いに感心な男ぢや。」カアネギイ氏は、美しい女優の唇にちらり眼をやりながら言つた。「二十弗受取つてみれば、この後接吻するにしても、精々大事にしませうからの。」カアネギイ氏は良い事を知つてゐるが、しかし道具方はもつともつと良い事を知つてゐたのだ。それは二十弗あつたら、接吻と、酒と、今一つ料理さへ味はふ事の出来る安直な世界がこの世の中にあるといふ事である。



十六人の女房

結婚といふものは、不思議なもので、一度で靈魂まで黒焦にしてこりこりするものもあれば、性慾もなく幾度か相手を更へて平氣でゐるものもある。ソロモンは一代のうち數へきれぬ程の女と縁を結んだといふが、あの通りの賢者の事だから、訊いてみたら色々面白い談話を聞かせてくれたに相違ない。

佛蘭西のボルドオにジエムス・ゲイといふ男が住んでゐた。何一つ立派な仕事は残さなかつたが、一代のうち十六人の女房を持つたといふので、かなり世間の評判になる事が出来たのは、飛んだ幸福であつた。

ある物好きの男が、ゲイに會つて訊いた事があつた。

「そんなにたんと奥さんをお持ちで、よく飽きませんでしたね。私などはたつた一人しか持ちませんが、夫でも少し持ち過ぎたやうに思ふ事も度々ありますよ。」すると、ゲイは急にここにこして、

「滅相な。女は一人一人みな別物ですよ。一人で懲りたからと言つて、外の幾人もが然うだとは限りません。つまり女房をたんと持つのは書物をたんと讀むと同じで、色々の知識を得るといふ事ですよ。」

と答へたといふ事だ。

そのゲイ爺さんは百一歳の時、十六人目の女房に亡くなられて、こつそり十七人目の後添を貰はうとしたが、親類縁者の者に留立されて、ぶつぶつ泣きながら、漸く思ひこまつたといふ事だ。爺さんに取つてこれは面白い新刊小説を讀み損ねた氣持がしたに相違ない。

英吉利に十二人の女房と十三度結婚したといふ不思議な男がある。一番目の女房はその男を捨てて、若い戀人と駈落したので、男は涙を流してその女の噂ばかりしてゐたが、程なく二度目の結婚をした。そして次ぎから次ぎへ結婚と葬式とを繰り返して、十一人目のお葬ひを出したのは、丁度八十四の夏だつた。それから爺さんは縹緞よしの寡婦婆さんと結婚したが、實をいふと其の婆さんは一番目の女房なので、婆さん自身は同じ男と二度目の結婚だとはよく知つてゐたが、爺さんは何にも氣づかないで、始終にこにこしてゐたさうだ。